

九大薬友合誌

第37号

平成26年1月20日印刷・発行編集 福岡市東区馬出3丁目1番1号 九州大学薬学部内九大薬友会事務局
印刷 小野高速印刷株式会社 大分市松原町2丁目1-6

会長挨拶

九大薬友会会長 井上和秀



寒い日が続きますが、薬友会の会員の皆様にはご健勝のこととお喜び申し上げます。さて、薬友会会長を仰せつかり4年目を迎えました。現在の厳しい社会情勢ではありますが、九州大学薬学部は将来を見据えた発展の布石を一つ一つ積み上げております。特に、今回は皆様に新研究棟「グリーンファルマ研究所（仮称）」建設のご報告が出来ますことを大変うれしく思います。詳しくは下記にありますのでご覧下さい。このように、薬学部は発展し続けておりますのでご安心ください。

1. 薬学の時代とそれを担う人材

グローバルな現代社会には様々な病気が存在し、新たに見出され、あるいは再興し、多くの人々がそのために苦しんでいます。医薬品はこれまで、これからもこれらの病気に対処するための大切なツールです。医薬品産業は国内だけでも約8兆円規模であり、知識集約型の重要産業として認識され、輸出産業としても今後の発展が期待されています。新成長戦略「ライフ・イノベーションによる健康大国戦略」の中で、大学が貢献できることとして、「我が国の最先端科学技術の医療分野へ展開」、「ドラッグラグ、デバイスラグの解消（創薬・育薬の橋渡し研究の迅速化）」及び「国際化の推進（アジアなどの海外展開）」があげられています。新政権になりましてもこの認識は変わらず（日本再生の基本戦略H23.12.24閣議決定）、世界レベルの医薬・医療技術のインフラ整備、創薬・医療機器開発等で「世界をリードする日本」を実現する戦略の策定が上げられ、これを実現する上で、創薬・育薬研究のできる人材育成のための組織改革が切に望まれています。これはまさに中央教育審議会の「大学院教育の体系化」及び「グローバル化社会への対応」に直結し、「グローバル化社会の大学院教育」及び「日本発の革新的な医薬品、医療・介護技術の研究開発推進」に寄与するものです。実は、政府に言われるまでもなく、これらはすでに本学の中期目標、中期計画に記載されています。つまり、私たち薬学研究院に課せられた責務は、新しい有益な医薬品シードを創製し、創製技術を開発し、あるいはまた育薬技術を開発すること、そしてその産業で活躍する人材や高度専門化する医療現場で職能を発揮する薬剤師を育てる事です。また、化粧品、食品添加物、健康食品、あるいは環境汚染物質などの生活関連物質に含まれる化学物質について私たちはより良く知り、それらをうまく活用したり、健康被害を未然に防いだりすることが非常に大切になっています。このような状況に対応できる人材、更にレギュラトリーサイエンスを実践する行政組織で活躍する人材、こういう方々を育てることも私たちに期待されています。この

ように、現代社会が必要とする医薬品・化学物質にかかわる技術、製品、人材すべてに私たちの薬学が生かされる状況は今後も変わらず続きます。

2. 九大薬友会の皆様へのお願い：薬友会のあり方への提案

この4年間常々考えておりましたが、そろそろ九大薬友会を単なる思いつきで語る会から、学生にとっても、卒業生にとっても有益な会にしたいものです。その一つはまずは学生の就職活動へのサポートです。アベノミクスの経済効果はあるものの世界経済には先行き不透明感があり、薬学部の学生が関係する雇用状況はかなり厳しいです。この問題は私達だけでは力不足で、後輩たちの就職活動に対して、薬友会の皆様のご協力がほしいところです。学生に対しては、強力な就職戦線のサポーターとして、あらゆるチャンネルを通じて九大薬学学生の就職を有利に導いていただきたいと思っております。特に、企業、研究所、病院および薬局において影響力の大なる地位にある方のご協力が是非とも必要です。加えて、卒業生が就職先で赴任したそれぞれの場所で社会人として困難にぶつかった場合の良き相談相手になっていただきたいと思っております。先輩方には、これまでの人生経験を後進に活かす事ができる場としていただきたい。こういったもろもろのつながりができるのが近い将来の九大薬友会です。どのようにすればそうなるのか、ネットワークをどのように作るべきか、課題は多いですが、今回、24回生の川原章氏と22回生の赤司俊博氏に「九大薬友会のあり方委員会」の委員として、薬友会が抱える問題の洗い出しと対応策を検討していただき御提言をいただきました。これを、別項に掲載しましたのでご覧下さり、ご賛同をいただけますようお願い申し上げます。

3. 最後に：新研究棟「グリーンファルマ研究所（仮称）」建設

長年の夢であった新研究棟の建設が平成26年12月竣工予定で進んでいます。場所は、東門から入ってすぐの、薬学部2号館東側テニスコート南前（元駐輪場あたり）です。地上5階建て、2000平米の比較的小ぢまりとした建物ですが（現在の学生・教員数に対する占有面積はルールで規定されていて、今回のフロア面積程度が限度です）、最新設備を備えた研究室・動物舎、研究者・学生の健康保全を第一に考えた有機合成設備、日本発の革新的な医薬品創出を目指す先端的トランスレーショナル研究推進のための共同研究施設（レンタルラボ、企業・外国からの研究者との共同研究を活性化するための研究スペース）や国家事業としての創薬プラットフォーム推進のための設備などで構成されています。また、地球環境に気を遣った様々な工夫も整備しました。経済的理由やあまりにも斬新なアイデアのために「企業がやらない、あるいはやれない」アカデミア創薬をここで行います。

私達は中央教育審議会の答申にあるように、薬学部としてのミッションを「薬」というキーワードに集約し、それに必要な人材を養成し、研究を進めることを社会から要求されています。社会ニーズに添うあ

りかたが求められています。基礎研究をしっかりしつつ、その成果をいち早く社会に還元しなければなりません。つまり、両輪をフル回転させて前進しなければなりません。これは、言うよりも実践は非常に困難ですが、新研究棟の実現により、これまでよりも遙かにやりやすくなります。薬学部では4年制と6年制の2学科制教育を行っています。これは異質なものを一つの容器に入れていて、ともすれば「薬学部」がばらばらになりそうな状況にあるわけですが、基礎・応用薬学指向の4年制創薬科学専攻と臨床薬学指向の6年制臨床薬学専攻の教育・研究に本研究棟を活用することで、臨床に強い薬学研究者教育やリサーチマインドを持った薬剤師教育に利用することが可能になります。また外国人若手研究者と研究の場を共有することによりグローバルな視野を持つ若手研究者の育成に貢献できるわけです。

先輩たちが残してくださった本学の確固たる地位を守り、更に発展させるために、私たちは様々な工夫をし、努力を重ねる所存です。どうぞ、いつまでも温かいご支援をたまわりたく、重ねてお願い申し上げます。最後になりましたが、皆様のご健勝を切にお祈り申し上げます。

新任あいさつ



薬効安全性学分野 准教授 仲 矢 道 雄

平成24年12月1日付けで薬効安全性学分野の准教授を拝命しました、仲矢道雄と申します。黒瀬等教授の御指導のもと、心臓の病態形成に関わるシグナル伝達の研究を行っております。

時が経つのは本当に早いもので、気がつけば九州大学薬学部助教として赴任してから、すでに約6年になりました。本当にあっという間の6年間でした。高校の修学旅行でしか来たことがなかった土地で生活することに期待と不安を持ちながらやってきたことがついこの間のことのように。研究室でのテーマもこれまでのバックグラウンドとは異なったため、当初は思うように進まず、上司の先生方には、随分とご迷惑をおかけしていたことと思います。温かく指導し、見守って下さったことに心より御礼申し上げます。また、赴任当初より、他の研究室の先生方にも機器を貸して頂く、discussionをして頂くなど、さまざまな御支援、御指導を賜りました。今回の文章を書かせて頂くにあたり、改めてこの6年間を振り返ってみると、九州大学薬学部で育てて頂いたというのが率直な気持ちです。まだまだ修行の身ではございますが、今後は九州大学薬学部の発展に貢献し、少しずつ恩返しができるかと考えております。

九州大学薬学部には、大きなポテンシャルを秘めた学生がたくさんおります。彼らのポテンシャルを最大限に開花させながら、この九州大学薬学部から世界に発信できる研究ができるよう、今後も頑張っていく所存です。引き続き変わらぬ、御指導、御鞭撻を賜りますよう、何卒宜しく御礼申し上げます。

定年退職にあたって



医薬品情報解析学分野 前教授 大 石 了 三

私は九大薬学部4年生の講座配属で故植木昭和先生の薬理学教室に入りました。教室には後に岡山大学医学部薬剤部教授になられた故荒木泰典先生が専修生としておられました。私は大学院修了後、九大医学部薬理学の助手をしていましたが、荒木先生のご縁で岡山大学医学部薬理学教室に移りました。その後、教室の先輩である五味田裕先生が荒木先生の後任として教授に就任された時に薬剤部に異動しました。そして、平成6年4月に青山敏信教授の後任として九大医学部薬剤部教授に就任し、同時に薬学府医薬品情報解析学分野を担当することになりました。それから、あっという間に19年がたち、平成25年3月に定年を迎えました。

薬剤部教授は病院薬剤部長を兼任するため、薬剤部の管理運営の責任者となります。特に私の教授就任以降は、医療における安全管理や病院経営への関与が強く求められるようになり、薬剤業務が大幅に拡大したため、教育研究よりもむしろ薬剤部の業務展開に関わる割合が徐々に大きくなりました。現在では当たり前の病院薬剤師業務である注射剤の監査や病棟での業務、がん化学療法への関与などは、赴任当初はほとんどありませんでした。このような状況において、九大病院薬剤部では処方せん疑義照会事例の病院運営会議での公表、注射薬調剤を準夜帯に行う完全三交代勤務体制の実施、ISO9001マネジメントシステムの認証取得、薬剤師の病棟常駐、がん専門薬剤師の育成、がん化学療法ワークシートを用いた薬剤管理指導など先駆的な取り組みを行い、医療安全の向上と薬剤業務の継続的改善に努め、大学病院薬剤部の模範となるような業務展開を行ってきました。

薬学教育においては、薬剤部の大きな役割である病院実習の充実を図りました。薬学教育6年制となってからは九大大生すべての11週間実習を引き受けていますが、事前教育を受けていることもあり学生の理解力や意識が大きく変わりました。薬剤部ではそれを受けて実習内容もさらに充実させ、変わりつつある病院薬剤師の役割を理解してもらえるように努めました。このような実習を受けた学生が将来、薬剤師のさらなる発展を担ってくれるものと期待しています。

研究においては、薬理学で中枢モノアミンやヒスタミンに関する研究を行ってきましたが、薬剤部は医療の現場であり特に薬剤師の関わりが強い副作用に関する研究、できればすぐに応用可能な研究に取り組みたいと考えました。成果が出るまでには年月がかかりましたが、ヨード造影剤による過敏反応や腎障害については発現機序をほぼ明らかにし、いくつかの既存の医薬品が副作用の予防に有用であることを示唆してきました。しかし、実臨床に生かすための臨床試験を進めるのはなかなか困難でした。平成14年頃九大病院産婦人科からバクリタキセルによる過敏反応がどうにかならないかと相談を受けました。薬理学的研究により当初考えられていなかった新たな発現機序を解明し、既存薬の中から予防薬を見出し、卵巣がん

患者でのプラセボとの二重盲検比較試験によりその有用性を証明しました。この結果は診療ガイドラインに掲載されていますが、少しでも実臨床に生かされたことは大きな喜びでした。最近では、抗がん剤による末梢神経障害を抑制する可能性のあるいくつかの既存薬を見出しており、今後の展開を期待しています。

病院薬剤部で大きく拡大した薬剤業務の展開に関われてくることができたのは、多くの先生方やすべての薬剤部職員のおかげだと深く感謝いたします。また、業務展開の中から生じる問題を研究課題として研究を進め、少しでも臨床現場にフィードバックできたことは、准教授をはじめ、薬剤部職員や医薬品情報解析学の大学院生、学部生の努力によるところが大きく、改めて感謝いたします。今後、九大薬学部から様々な研究領域において素晴らしい成果が報告されることを楽しみにして、定年のご挨拶といたします。

九大薬友会の在り方の改革に関する提言

平成25年11月1日

九大薬友会会長 井上 和 秀

2013年5月の評議員会において、私から標記の件につき2名の評議員（赤司俊博さん、川原章さん）を指名して検討を依頼していたところですが、下記のとおり提言の報告がありました。

私としては妥当な見直し案と考えておりますが、会員の皆様の御意見も賜りたいと思います。どうぞよろしく御願いたします。

<会運営の現状認識>

○九大薬友会の年会費の納入状況は、平均約25%である。最も高い回生では約40%であるが、卒後10年程度の回生では10%にも満たない状況にあり、若い年齢層の参画が弱く、このことは薬友会参加のメリットが認識されにくい現状を表していると考えられる。

○このため、薬友会の財政状況は危機に瀕しており、近年各支部への補助金の減額などの措置を講じているが限界に近づいている。

○また、支部総会の開会やHPの維持・管理など、一部会員のボランティア活動に依存している部分も多い。また、時代は急速にICT化が進展しており、薬友会について、今後の持続的な在り方を検討する時期に来ている。

以上のような会運営の現状認識のもと、改めて薬友会の存在意義・目的についてまとめてみると次のようにまとめられる。

<薬友会の存在意義・目的>

○ゆるやかな同窓生の懇親の場という基本的な立場は維持しつつ、また個人情報・プライバシーにも配慮しながら、会員の相談機能や知人等紹介機能などを付加していくべきと考える。

(背景・理由)

☆地域で活躍する薬剤師（薬局・卸など）、科学者（大学・研究所・企業）、行政など様々であるが医薬品等に関わるという点で共通点がある。

☆現在の時代背景からは一律に相互に強く関わり合う環境の提供は不適当であり、適度な距離感のある環境の提供が望ましいと考えられる。

☆40代頃までの若い時は、自分の仕事に専念する時期であり、必ずしも社会動向やつながりを意識する年代ではないことなどから、強制的な入会などの対応は行わず、これまで同様、あくまで任意での入会とする。これまでも一定の年齢になってから薬友会に参加するようになった人物は少なくない。

☆また、地理的に世界を目指す場合と、地域で活動するなど個人の選択に委ねる部分があり、また長い人生の中では両方とも起こり得る。

☆現在はインターネットで様々な情報が入手可能であるが、同窓生同士が直接会って話を聞くと言うのも、自分の状況にあった助言などが得られることもあり、大切である。特に今後人材の流動化が進展すると思われることから、いろいろな立場（職場）の人物間で同窓という立場で意見交換できる場の提供は貴重と考えられる。

以上のような現状認識のもと、いくつかの調査や関係者からの聴取などを踏まえて下記のとおり改革案を提示する。

記

①九大薬友会の本格的専用HPを開設して充実を図り、会員相互の双方向性のコミュニケーションの円滑化を図る。

（本HPは小野高速印刷株式会社が発行し、既に九大薬学部や福大薬学部が利用しているシステムを基本に構築する：初期費用30万円）

*コミュニケーションの活発化

*同好会的な集まりの活性化

*会費納入の電子決済化 等が図られる見込み。

これにより、名簿管理・開催通知などはHPで告知したり、基本的に電子的にメールアドレスを通じて行う形式に変更する。高齢などのため、対応が困難などの特別な理由がある場合は過渡的に郵便を使用して管理することを認める。

なお、メールアドレスは基本的にBCCで扱い、個人情報の取扱に留意する。

* HP開設後の管理窓口担当者には相当の対価を支払う。

（現在は薬学部教員のボランティアに支えられているが、クレイマー対応などもあることも考えると相応の対価を支払うことが当然と考えられる：月額2万円程度。また管理窓口担当者の免責についても合意しておく必要あり）

②九大薬友会名簿の発行は、これまでの3年毎から5年毎に変更する。また、原則として無償配布（終身会員や3年間会費全額納入者に対して行ってきた）は廃止する。なお、終身会員に対しては別に名簿配布の手立てを考案する。

③会費納入等に当たっては寄付などを集めやすくする観点から振替用紙等の様式を改善する。これにより、終身会員の一部からも会費に充当できる財源がいくらかなりとも確保できる。

* 会員の皆様のご意見をお待ちしております。

3月末を期限としまして九大薬友会事務局までお願い致します。

九大薬友会

庶務幹事 山田健一

E-mail: yakuyu@mail.phar.kyushu-u.ac.jp

812-8582 福岡市東区馬出3-1-1

九州大学大学院薬学研究院

九大薬友会事務局

電話: 092-642-6624 Fax: 092-642-6626

近況報告

崇城大学薬学部生化学教室 准教授 大栗 誉 敏

九大薬友会の皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。平成21年まで蛋白質創薬学（旧免疫薬品学）分野で助教をしておりました大栗です。早いもので熊本の崇城大学薬学部へ移って4年が過ぎました。赴任した当初から新たに担当する講義の準備や新たな研究テーマの取りかかりなどバタバタの日々を過ごし、あっという間に時が過ぎました。5年目に入った今、ようやく落ち着いてきた気がします（遅過ぎ!）。特に学生への教育・指導という点では、私大薬学部であるが故に大きく時間が取られております。私の祖父祖母は中学の教師をしており、叔母も教師でありました。そんな教師一家の長兄である父は、教師ではなく自分が選んだ全く別の職に付きました。私も好きな道を選ばせてもらい、大学での研究に従事して参りました。しかし今では大学で教育にも重点を置かなければならない立場となっており、妙な宿命を感じております。ただこれが自分に合っているようで大変やりがいを感じており、教育者の血が受け継がれているのだと実感しています。

さて、本業(?)の研究とは申しますと、なかなか思うように進んでおりません。比較的新設である本学部は4年制卒の修士・博士過程の学生がもともとおらず、現在では6年制である為に大学院進学者は少なく、当研究室には院生がいません。学部生は5年から研究室に配属されますが、長期の実務実習や国家試験対策などで研究をやる期間が限られてしまい、実験をようやく任せられそうになったくらいでタイムアウトという始末です。要するにマンパワー足りません。アンパンマンもびっくりです。これではいかんと思ひ研究の時間を増やしていこうと決意しているところです。5年目を迎えた今、九大でやっていた実験も再開させ研究に労力を十分注ごうと思っております。そして教育にも力を入れ、学生達に愛と勇気を与えていけたらと思います。



舟越和久先生を偲んで

薬物分子設計学分野 末 宗 洋

第4講座（薬化学講座）にて永年に亘り研究と教育に正面から取り組まれてこられた舟越和久先生が平成24年11月28日に急逝されました。享年80歳でした。衷心よりお悔み申し上げます。

舟越先生の薫陶を受けた極めて多くの学生・院生がいます。先生は学部4回生・院4回生で、定年を迎えられたのは平成8年・学部45回生の卒業とともにでありました。薬化学講座一筋の40年間でした。こうして見ますと学部22回生の筆者は全体のほぼ半ばにてお世話になりました。写真は平成7年4年生5名と古賀教授、筆者に囲まれた舟越先生。

研究室の変遷に伴い、その運営に先生の多大な寄与がありました。すなわち、初代津田教授から第四代古賀教授に至る薬化学講座の歴史を創る中心に居られたこととなります。

- 1) 研究室の立ち上げ時にすこし遅れて入室（初代津田恭介教授）
- 2) 昭和31年第2代浜名政和教授の初めての院生として研究に専念。
- 3) 昭和36年教務員として採用。同37年助手に昇任。
- 4) 昭和41年より2年間、米国NIH留学。
- 5) 平成57年浜名教授定年退官、酒井浄教授赴任。研究内容を複素環化学から不斉合成反応化学に転身。
- 6) 平成2年助教授に昇任。
- 7) 平成6年酒井教授定年退官、平成7年古賀登教授赴任。
- 8) 平成8年定年退官。

この間、研究面では、複素環化学および不斉合成反応化学のいずれにおいても、独創性の高い、世界的にも先駆的な研究成果を挙げて来られました。

研究面と同様に、院生への指導は年月を経ても深く心に刻まれています。それは人格と人格のまともなぶつかり合いから初めて生じる信頼感に根差した交流と云えましょう。決して舟越先生と一院生との個別な関係だけに留まりません。その時代の研究室員を全て巻き込む形での濃い人間関係が構築され、その中で、院生同志の切磋琢磨があったのです。

お酒が好きで、囲碁・将棋は普通の院生では相手になりません。還暦を迎えた頃でもパワーテニスを志向。生粋の博多弁を駆使した語りは忘れられません。研究を通じて多くの学生を愛し、そして、学生から慕われた舟越先生。

心よりご冥福をお祈り申し上げます。



海外だより

The Pennsylvania State University, Pennsylvania, USA

古賀 貴之

私は2012年6月よりアメリカ合衆国北東部のペンシルベニア州において、ペンシルベニア州立大学 Center for Molecular Toxicology and Carcinogenesis の Veterinary and Biomedical Sciences 部門に Postdoc として研究留学しています。拙文で恐縮ですが、私の研究生生活について綴らせていただきます。

ペンシルベニア州立大学はペンシルベニア州中央部アルゲイニー山中のステートカレッジという大学町に位置しています。同町は小さな田舎町であり、少し郊外へ出ると、すぐに雄大な自然が迎えてくれます。気候は九州大学のある福岡と比較して涼しい、若しくは寒い気候で、四季のはっきりした気候です。夏は福岡ほどには気温が上昇しないのでとても過ごしやすいのですが、冬は最高気温が常に氷点下を下回り、毎日雪が降り積ります。生まれも育ちも福岡である私にとって、この冬の気候に新鮮さを覚えるとともに少々鬱陶しく感じることもあります。治安は比較的良く、雰囲気は九州大学の近くと少し似ているような気がします。同校は教育・研究とともにスポーツの盛んな大学として知られています。全米最大級のアメリカンフットボールのスタジアムを有しており、満員のスタジアムの光景は圧巻の一言に尽き、一見の価値があります。こちらの学生は自分の学校をととても愛しており、同校の愛称である Penn State、若しくは同校のマスコットである Nittany Lion のロゴの服を身にまとった人を多く見かけます。さらに、フットボールのシーズンともなると、大学内外ともにこれらの服を身にまとった人であふれかえります。

私達は Jeffery M. Peters 教授の下、peroxisome proliferator-activated receptor (PPAR) β/δ の生理的役割、特に各種癌発症における役割について日々研究をしています。PPAR は α 、 β/δ 及び γ の三つのアイソフォームに大別される転写因子群です。なかでも PPAR β/δ は他の二種のアイソフォームと比較して未解明な点が多く残されており、今後の研究の発展が大いに期待できる分野だと考えています。現在私は、主としてアルコール誘導性肝障害における PPAR β/δ の役割について研究を進めています。アメリカではアルコール誘導性肝障害に起因する死亡事例が年々増加しており、その発症機構の解明は治療法や対処法の構築の観点からも重要であると考えています。Peters 教授は PPAR β/δ 研究において著名な方で、今までにも多くの論文を発表されています。私の研究についても、教授は的確かつユニークなご指導・ご指摘をなさるので、教授とのディスカッションはとても楽しく思っています。研究室には現在スタッフ、学生含め15名在籍していますが、皆とても気さくで、明るい研究室です。学ぶことの多い毎日ですが、教授をはじめとした研究室の皆様ののおかげで有意義な研究生生活を送っております。

日本とは言語も文化も違うので、最初のころは公私ともに大変な思いをたくさんしましたが、現在ではペンシルベニアでの生活は公私ともに大変変りあるものだと感じておりますし、貴重な経験を得ているとの実感もあります。末筆ではございますが、私の留学にあたり、これまでご指導下さいました九州大学大学院薬学研究院の先生方に感謝します。特に、分子衛生薬学専攻分野の山田英之教授、石井祐次

准教授および武田知起助教からは熱心なご指導を賜りましたことを深く御礼申し上げます。



ラボメンバーの集合写真
最上段一番左が Peters 教授。最上段左から二番目が筆者。

支部だより

(関東支部)

関東支部長 秋田 弘幸 (17回生)

薬友会会員の皆様には益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。九大薬学部卒業生も平成25年3月末で第62回生となり、関東支部の会員数も増えて1000名を越す大所帯となってきました。関東支部は当初、久恒先輩(第1回生)を始めとする1~3回生の方々が中心になって、昭和30年代の初めに発足し、活動が開始されました。当初は懇親会中心の総会を開き、その後、暫く途絶えた時期もありましたが、平成9年頃まで活動されてきました。その後、星野先輩(第8回生)が引き継ぎ、次いで平成13年度からは伊田先輩(第13回生)が引き継ぎ、平成19年5月20日に開催された関東支部総会で、秋田が支部長を引き継ぐことになりました。伊田支部長になってから、総会担当幹事を「回生ローテーション制」に変え、年度毎に総会担当幹事を順送りにする方法を取り入れ現在に至っています。

平成25年度の薬友会関東支部総会・講演会・懇親会は、総会幹事(石川真理子氏;(32回生))のお世話で5月19日(日;9:30~14:30)、オペレッタ丸ノ内ラスタワー店、参加者75名(懇親会参加者68名、延べ82名)で開かれました。総会では支部長の挨拶ののち、平成24年度の事業報告(総会・講演会・懇親会の実施、ホームページの開設)及び会計報告がなされ、出席者の皆様の拍手により承認されました。次に、平成25年度事業計画及び予算案が説明されました。1) 総会・講演会・懇親会の実施 1)-1 本年度より、講演会を薬剤師研修センター認定研修会として開催し、1)-2 講演会会費500円、懇親会会費5000円(平成25年3月卒業生・修了者及び在校生は無料)を徴収致しました。2) 薬友会本部からの補助金が削減されたため、経費節減策を実施し、2)-1 総会会場を学生会館(53万円)からオペレッタ(30万円)へ変更し、2)-2 総会案内の連絡方法として「往復葉書からメールへの変更」についてのアンケートの実施したところ、アンケート結果は次のようになりました。回収

率406名/887名=46%、メール希望者：60%、往復葉書希望：25%、その他（未記入、案内不要）：15%。3）九大薬友会関東支部のホームページサーバーの変更及び活用状況の報告が向山氏（15回生）よりありました。最後に、橋本氏（13回生）により、九州大学東京同窓会での活動の報告（幹事会、サマーフェスタ、賀詞交換会（薬学部からは12名参加））と、本年度のサマーフェスタ（平成25年8月31日（土）、薬学部からは10名参加）の案内があり、総会が無事終了しました。

続いて講演会（10：00～12：00）に移りました。三人の講演者と講演内容についてご報告致します。最初の講演者は岡田弘晃氏（17回生：東京薬科大学名誉教授・製剤機械技術学会会長・（株）岡田DDS研究所所長）で、演題は「創薬の現状とDDSによる支援」でした。新薬の中心は低分子医薬品から抗体医薬やsi-RNAなどバイオ薬品に移りつつあり、これらのバイオ薬品の安定性を確保し、患部に必要な量を届けるためにDDS（Drug Delivery System 薬物送達システム）製剤化技術による支援が必要とされています。また、既存薬も、DDS製剤化により、さらに効果・安全性を高め、患者にとって使い勝手を良くする等、医薬品としての寿命の延命をさせることがなされています。事例も交えて、ご講演して頂きました。二番目の講演者は最上輝未子（中園 博美）氏（32回生：NPO法人ヘルスコーチ・ジャパン代表理事）で、演題は「自分自身を知ることの大切さ～ 薬剤師業務にも活かせるコーチング」でした。コーチングとは、会話を通じて、相手に早く、楽しく、楽に目標を達成できるように支援する技術で、根底に「自分自身を知る」という基礎が必須であることなどを、楽しく、ご講演して頂きました。子育て、教育、職場など、応用は広く、これからの患者中心の医療にも最適の技法と考えられました。三番目の講演者は木村 宇一郎氏（38回生：医薬品医療機器総合機構（PMDA）安全第一部安全性情報課課長）で、演題は「活用しましょう！ PMDA メディナビー-医薬品・医療機器の安全性情報収集-」でした。昨年に引き続き、医薬品医療機器総合機構（PMDA）による、ネットを用いた医薬品などの安全性情報の情報提供について紹介して頂きました。医薬品医療機器情報提供ホームページ(<http://www.info.pmda.go.jp/>)からの最新の添付文書の入手法について、次いでインタビューフォームから副作用の情報まで瞬時にアクセスすることができるの話がありました。PMDA メディナビについては上記ホームページから登録すれば、医薬品の副作用等の重要な情報を即時に送ってくれるとのことでした。ご講演を頂きました、3人の先生方、大変お忙しい中、資料のご準備をはじめ、遠路よりお越し頂き、誠にありがとうございました。

講演会に引き続き、懇親会（12：30～14：30）に移りました。支部長の開会の辞、引き続き最長老の高崎氏（昭和28年卒、1回生）の乾杯で、歓談が始まり、新卒の落石氏、新修了の山口氏の挨拶及び次年度当番幹事の33回生（大薄氏、米本氏、堂本氏）の挨拶をさみ、昨年からはまった「松原に」の合唱、星野氏（8回生、2代目支部長）の閉会の辞でなごやかに締めくくられました。32回生の皆様、事務局の神山氏（46回生）、昨年度の当番幹事の松永氏（31回生）ら、たくさんの方々のご協力のおかげで無事、終了しました。参加者の皆さまにも楽しんでいただけたら幸いです。

薬友会関東支部ホームページ(<http://kyushu-yakuyu-kanto.la.coocan.jp/>)では、これまでの支部総会の様子を報告しておりますので、是非一度ご覧下さい。以上が関東支部からの報告です。



（関西支部）

関西支部 幹事長 尾崎 通（31回生）

九大薬友会の皆さま、いかがお過ごしでしょうか？

九大薬友会関西支部が設立されてから29年が経過し、次年度の総会で30周年を迎えようとしています。会員数は既に500名を越え、関西圏の製薬企業、大学、医療機関等において様々な分野、職種で活躍されています。

さて、関西支部ではホームページの運営、年3回の幹事会、および親睦会を兼ねた年1回の総会を主体とした同窓会活動を行っていますが、本年度は9月20日（金）に大阪駅前のガーデンシティクラブ大阪において29回目の同窓会・懇親会を開催させていただき、40名の会員の方にご参加いただきました。

総会では、支部長挨拶の後、前年度の活動報告および会計報告、本年度の活動計画および予算案、次期支部役員候補の紹介および承認が行われ、次回総会においては30周年を記念した特別講演を企画していること、および寄稿集の発行を予定していること、そして支部運営費の減少傾向に対する対策として総会案内状送付における電子メールの利用などを検討することを活動計画にしていこうと報告させていただきました。

総会に続く毎年恒例の講演会では、九州大学薬学部病態生理学教室の野田百美准教授にお越しいただきご講演いただきました。野田先生は、脳神経細胞の中の“グリア細胞”に注目した病態生理学的研究を中心に、家族性パーキンソン病の原因遺伝子の生理機能、肺癌脳転移の機序解明、酸化ストレスによる脳疾患の予防機序など、多くのテーマで研究されていますが、当日は「新規メディカルガス・水素がもつ急性・慢性抗酸化作用」という演題でご講演いただきました。水素を含んだ水を飲むことで、活性酸素が原因で起こると考えられているパーキンソン病等の脳神経変性疾患の予防や治療に役立つかもしれないということ、最近の研究成果をもとにわかりやすくご説明いた

できました。水素は水の電気分解により家庭でも比較的簡単に生成することが出来ることから、今後の臨床応用が大いに期待され、会場にいた製薬企業に勤める会員も医療に貢献できる可能性を示した研究成果の発表に大変興味深く聞き入っていました。

講演会のあとは、恒例の青木顧問のご発声・乾杯で懇親会が始まり、野田先生をはじめ参加者の皆さんにゆっくりご歓談いただきました。また、懇親会には毎年新入会員をご招待しておりますが、今年度は2名の新入会員の方にご参加いただき、自己紹介と共に抱負を語っていただきました。終会前には恒例の抽選会で盛り上がったあと、最後は参加者全員揃っての記念撮影を行ない、盛会の内に総会を終えることができました。



野田先生を囲んで



懇親会集合写真

さて、関西支部同窓会が約30年間途切れることなく開催されてきたことは、歴代の役員が仕事の合間を縫って活動してきた努力の賜物であり、卒業生の皆様に役に立ちたいという気持ちが延々と繋がれてきた証だと思います。一方、私ことではありますが、最近就職難の話題を耳にする機会が多いせいか、我々の同窓会活動が卒業生だけでなく、現役の学生に対しても何か役立つことがないかと考えることがあります。実は、今回講師としてお越し頂いた野田先生と懇親会閉会后に少しお話しさせていただいた時に、先生との何気ない会話の中でふと感じたことがあります。それは、企業に長年勤めている私たち卒業生は今の大学の現状について結構知らないことが多いということです。また、同じことが大学にいる先生方や学生にも言えるかもしれません。今の製薬企業の研究所ではどのような技術や研究思考を持った学生を本当に必要としているのか、今どきの学生は何を期待して企業に就職しようとしているのか等、例えば就職活動においても双方の相互理解がやや不足しているかもしれないと思った次第です。以前は、会社に就職した先輩が大学を訪問する機会が結構多かったように思い

ますが、現状はいかかでしょうか。先輩後輩のつながりが薄くなった今、これに代わる人脈作りの場の一つとして、ひょっとして同窓会活動が役立つかもしれないと思った次第です。

最後に、九大薬学部という共通項を持つ仲間との関係性を広げていけるような場を提供できるよう支部活動を続けたいと考えていますので、今後とも支部活動へのご理解・ご協力をよろしくお願い致します。

(福岡支部) 福岡支部長 野田浩司(7回生)



九大薬友会のみな様にはお健やかに過ごしのこととお慶び申し上げます。もっとも、一方では特定秘密保護法制定や集団的自衛権行使容認などが粛々とすすめられており、福島原発事故の収束も事実上目処が立たず、四号機核燃料貯蔵プールは崩落のおそれも指摘されており、なかなか気の休まるときがありません。

さて、2012年度のよか薬会(福岡支部)総会・講演会・懇親会は、11月9日(土)に福岡ガーデンパレスで開催されました。総会ではよか薬会担当幹事から事業報告、会計報告などがあり、つづいて大学院薬学研究院長の井上和秀教授から「九大薬学研究院の活動」と題して各教室や教員、研究員の活発な研究活動について詳細な報告がありました。教育活動の成果としては、2012年3月に新6年制度発足以来初めての卒業生となる約30名が巣立っていきました。薬剤師免許取得を目的としない4年制の学生はすでに2010年、2011年にそれぞれ50余名づつが卒業しており、2012年3月で第3回目の卒業生となります。この報告を書いている2013年11月では、6年制の学生が第2回目の、4年制学生が第4回目の卒業生として社会へ旅立っていますが(一部は大学院進学)、それぞれ両制度の学生たちがどのような形で世の中で活躍し始めているか、期待と興味の持たれるところです。

講演会では、九州大学大学院医学研究院・臨床神経生理学分野の飛松省三教授によりアルツハイマー病、パーキンソン病、てんかん等の脳の病気について基礎と臨床研究に基づくお話がありました。パーキンソン病はさまざまな精神的ストレスも大きな原因の一つとされており、アルツハイマー病や痴呆症も含めて競争社会、高齢化社会の中でけっして人ごとではない意義深いお話でした。

ところで2013年度はじめのよか薬会幹事会で、よか薬会総会講演会にお招きする演者の選び方について話しあいました。その方法の1つとして、九大薬学を卒業したのち母校を離れ、様々な分野で活躍中の同窓生を積極的にお招きしようということになりました。まずは1975年卒業(24回生)の甲斐明美さん(薬剤学教室出身)をお願いすることになりました。(もっとも、2009年に影浦光義さん(13回生、当時:福岡大学医学部総合医学研究センター教授 法医中毒学)に「法医中毒学実務の現状 - 冤罪根絶を目指して「裁判員制度」への期待」というテーマで講演していただきましたので、甲斐さんと二人目ということになりますか)。甲斐さんは卒業のち東京都立衛生研究所微生物部に勤務し、一貫して細菌、ウイルス、食中毒などの研究および実務面で活躍され、2003年の組織改編により東京都健康安全研究センター微生物部に勤務、2009年同センター微生物部長に昇任されました。以前O157による食中毒事件が日本中を吹き荒れましたが、その時に甲斐さんが開発した菌の検査法が現在もスタンダードとして広く用いられているとのこと。甲斐さんの専門は、腸管系病原菌(大

腸菌、カンピロバクター、腸炎ビブリオ等の食中毒起因菌)に関する細菌学と生態・疫学の分野です。著書も多数あり、文部科学省、厚生労働省などの各種委員会委員を務めておられます。講演演題は「食中毒のリスクを低減させるための課題」、長年にわたる豊富かつ貴重な研究・実務の経験をバックにしてお話します。

社会で活躍しておられる九大薬学卒業生は他にも多々おられると存じますが、みな様にもそのような方々をご推薦下さいますようお願い申し上げます。



さて、旧制度の卒業生と新制度の大学との接点がだんだん薄れていくように感じられるこの頃、大学教員と卒業生会員相互の交流を目的とするよか薬会の役割はとて大きいと思っています。よか薬会行事への新旧会員のみなさま方の、とくに若い卒業生の、そして何にもまして薬学部現教員の方々にご参加をお願いし、より密度の高い交流の場としてよか薬会が会員相互交流に少しでも貢献できればと、心より願っている次第です。(2013年11月6日記す)

よか薬会(九大薬友会福岡支部)役員

会長 野田浩司(7回生)、副会長 濱田朝子(9)、副会長 峯本正夫(19)、庶務 山下正義(28)、会計 一木孝治(48)、監査 黒木賀代子(11)、弓山紀代子(12)、江森節子(16)、末宗 洋(22)、米澤和明(24)、千々和勝己(27)、麻生真理子(33)、江頭義満(34)

(長崎支部)

長崎支部長 原田平輝志(29回生)

九大薬友会の皆様、こんにちは。

長崎支部では、平成24年度支部総会を平成25年2月16日(土)、JRハウステンボス駅近接のホテルにて開催いたしました。開催に先立ち、九大薬友会の現状(窮状)を伝えるメッセージを添えて、長崎県内在住のほぼ全ての会員の皆様にメール及び往復はがきにて、支部会参加を呼びかけました。突然のはがきにびっくりされた会員もおられたかと思いますが、薬友会の現状を反映してか、往復はがきに返信をお寄せいただいた会員は36%に留まりました。最終的に25名の参加を仰ぎ支部総会を開催いたしました。参加されなかった方の中から、長崎支部への激励のメッセージを多数頂きました。本誌面を借りて、これらの方々に厚く御礼申し上げます。

さて、支部総会では、「薬友会運営費減少に対する対策」について議論いたしました。いろいろ意見を頂きましたが、結論は、「今後薬友会(長崎支部会)活動に付加価値をつける努力をする」ことで一致いたしました。その方策については、今後会員間で議論を進めていくこととなりますが、そのためにも、まず第1に会員間で情報を共有し、

自由に議論し合える環境づくりが大事だと思われました。そこで、今回の支部総会の参加者を中心としたメーリングリストを作成し、情報交換等に活用していくことにいたしました。さらに、長崎支部では、長崎県内在住の九大薬学部卒業生及び長崎県内への就職を希望する九大薬学部生を対象として、相談窓口を下記のとおり開設致しました。この相談窓口を先のメーリングリストと連携させる事で、会員からの就職相談や医薬品情報相談等に対応していきたいと考えております。

相談窓口: terushi-niu@umin.ac.jp

この相談窓口は、九大薬学部ホームページ>卒業生の皆様>九大薬友会>長崎支部内にリンクを貼らせて頂いておりますが、階層が深いためか、未だ1件も相談を頂いておりません。これを機会に、是非ご活用ください。

支部総会に引き続き懇親会を開催(写真)いたしました。25名の参加者中13名を長崎国際大学薬学部の教員が占めるという状況でした。姫野勝長国大薬学部長(14回生)を筆頭に酒好きばかりの集まりですので、懇親会は盛り上がり過ぎたことは言うまでもありません。平成25年度の総会も年明けの2月に予定しておりますが、メーリングリストを活用して、さらなる参加者の増加を計画しております。

最後に、長崎国際大学に平成25年新たに以下の2名の先生が赴任され、長崎支部会員になられたことを報告して、長崎支部からの近況報告とさせていただきます。

藤田英明(長崎国際大学薬学部、機能形態学研究室、教授、37回生)

黒川健児(長崎国際大学薬学部、細胞生物薬学研究室、准教授、43回生)



(大分支部(豊薬会))

副田晴香(平成24年卒、動態)

平成25年8月3日(土)午後5時30分より、平成25年度豊薬会同窓会が開催されました。当日は、昭和31年卒業生から平成24年卒業生までの多彩なメンバー25名が集いました。

第1部は、大分市のコンパルホールにて、県内でご活躍されている3名の先生方にご講演いただきました。大分岡病院の井上真先生(平成15年院卒、薬効)は、集中治療室(ICU)における薬剤管理指導業務の立ち上げについてお話されました。大分市医師会立アルメイダ病院の菅田(旧姓野田)佳子先生(平成12年卒、衛生)は、多職種チームによる緩和ケアについて、薬剤師の役割を話していただきました。輔仁薬局の渡辺哲夫先生(平成7年卒、衛生)は薬局におけるプレアボイド、インシデント・アクシデント報告について、多数の症例を紹介いただきました。大学時代の話を通じ交ぜながら、大変和や

かな雰囲気の中、会が進んでいきました。

第2部懇親会は、郷土料理処 こつこつ庵にて行われました。豊友会会長 赤嶺佳子先生（昭和41年卒、分析）の挨拶のあと、局伸男先生（昭和48年卒、薬剤）の乾杯で宴となりました。テーブルには大分の郷土料理であるとり天や関アジ、関サバが並び、同窓生が旧交を温めました。菅田哲治先生（平成4年卒、薬製）の司会で参加者各自スピーチを行い、自己紹介や近況報告いたしました。薬局・病院薬剤師のほか、医薬品卸業、大分県職員、大学教授など多業種にわたる興味深いお話を聞くことができました。宴の最後は、豊薬会恒例田原正人先生（昭和31年卒、薬工）による万歳三唱で締められました。

豊薬会同窓会は毎年開催されています。次回も多くの同窓生が参加できることを期待します。



(熊本支部)

熊本支部長 井本修平 (49回生)

九大薬友会会員の皆様、お変わりなく益々ご清栄にてご活躍のこととお慶び申し上げます。熊本支部の近況報告をさせていただきます。熊本支部は、長い間活動を行っていませんでしたが、今年も懇親会を2013年7月26日（金）に熊本ホテルキャッスルにて開催いたしました。今年度は、残念ながら昨年よりもやや少ない15名での開催となりました。会は参加者全員の自己紹介の後、野原前支部長の音頭で乾杯。熊本ホテルキャッスルのおいしい中華料理に舌鼓を打ち、最近の話題などで華が咲いていたようです。最後は大栗先輩の挨拶、写真撮影で閉会といたしました。

ところで、話は前後してしまうのですが、熊本では九州大学全学部での同窓会（九州大学熊本同窓会）も発足いたしました。2013年2月9日（土）に九州大学熊本同窓会記念講演会・設立総会・大懇親会が熊本全日空ホテルニュースカイにて開催されました。九大薬友会熊本支部会員の皆様にもご連絡を差し上げたところ、薬学部からは10名の方にご参加頂き、全体では240名程の賑やかな懇親会となりました。この九州大学熊本同窓会も年1回の懇親会が予定されており、熊本支部会員の皆様には改めてご案内させて頂きたいと思っております。こちらの会は学部を超えて在熊の様々な業種の先輩・後輩との交流を深めることができる良い機会かと思っておりますので多数の方にご参加頂きますようこの場を借りてお願い申し上げます。

さて、このように熊本では九大全体の同窓会組織も立ち上がりましたので、薬友会の熊本支部としてはどのような活動をすればいいのかというところで私自身は非常に頭を悩ませています。今後漫然と支部同窓会を続けても人は集まらないのではないかと考えておりますので、

支部活動の意味ある活性化のためにはどうすればいいのか皆様よりメールなどでご意見を頂ければと思っております。末筆ながら、会員の皆様の益々のご健勝とご多幸をお祈り申し上げるとともに、熊本支部へのさらなる発展へ向けご支援をお願いしご挨拶といたします。

熊本支部連絡先：

〒860-0082 熊本市西区池田4-22-1 崇城大学薬学部 井本修平
電子メール：simoto@ph.sojo-u.ac.jp



熊本支部懇親会集合写真
(熊本ホテルキャッスルにて、2013年7月26日)

(鹿児島支部)

鹿児島支部 事務局 深水知英 (50回生)

九大薬友会会員の皆様、お元気で活躍のことと拝察申し上げます。

当支部では、毎年、支部総会を「お盆明けの日曜日に」開催していますが、今年も25年度支部総会を8月18日の日曜日に開催いたしました。九大薬友会評議員会報告、24年度支部会計報告、25年度支部事業計画について協議を行った後に、勉強会と懇親会を開催しました。

今年度の総会は、多岐に渡る年齢層（2回生から53回生に至る）の会員18名の参加を得て、盛大に開催されました。総会後の勉強会においては、2人の講師に講演して頂きました。最初に、鹿児島大学病院薬剤部 服薬指導管理主任 牛之濱風見先生（49回生）に「薬剤師の病棟薬剤業務について」という演題で講演して頂きました。次に特別講演として、坂元醸造株式会社 専務取締役 長野正信先生に「くろずの世界」について講演して頂きました。

牛之濱先生の「薬剤師の病棟薬剤業務について」の講演では、鹿児島大学病院薬剤部で昨年より開始した病棟薬剤業務について、どのような取り組みを行っているか、また、薬剤師が病棟で業務することは、医療スタッフや患者にどのようなメリットがあるのか、具体的な例を示していただきながら、説明していただきました。参加者は、病院薬剤師、薬局薬剤師ばかりでなく、多方面で活躍されている方も多いため、病院薬剤師にとって、大きな転換となった病棟薬剤業務について、実際の現場の声を聴くことができたのは、大変有意義であったと思われます。

長野正信先生は、東京大学薬学部のご出身ではございますが、元鹿児島支部長の坂元昭夫先生（2回生）が、坂元醸造の代表取締役会長であられるご縁から、今回は是非ともご講演を賜りたくお願い申し上げます。快く引き受けてくださりました。講演では、くろずの

歴史やその製造方法、なぜ鹿児島県の福山町で多くが作られているか等、興味深いお話しをしていただきました。また、近年、非常に健康によいとされているくろずであります。これまで明らかになってきたその作用メカニズム等の科学的なお話もしていただき、会員一同感銘を受けた次第であります。

勉強会終了後は、恒例の懇親会を開催し、年1回の会員相互の親交を深めることが出来ました。懇親会では毎年、会員の方々の近況報告をしていただいておりますが、仕事からプライベートまでいろいろな話題が飛び出し、懇親会の最大の楽しみとなっております。

当支部としては、もっともっと多くの支部会員の皆様にご参加いただけることを切に願っております。「行ってみたいけど、一緒に行く人がいない。」「興味はあるけれど、敷居が高い」と思われている方々、是非、一度ご参加ください！決して堅苦しい会ではございません。知り合いがいなくても、同じ大学ということだけで、必ず話は盛り上がりますし、いろいろな繋がりができます。鹿児島県内にお住まいで、まだ案内が送られてきたことが無い方は、是非一度下記までご連絡ください。どうぞよろしくお願いたします。

<連絡先>

〒890-8520 鹿児島市桜ヶ丘8-35-1

鹿児島大学病院薬剤部 深水 知英宛

(TEL 099-275-5543, FAX 099-265-5293)

E-Mail fukazu@m2.kufm.kagoshima-u.ac.jp

教室だより

薬物動態学分野

卒業生の皆さま、いかがお過ごしでしょうか。現在、薬物動態学分野は家入一郎教授、廣田豪助教のお二人のご指導の元、楽しい研究室生活を送っております。

最近の研究内容として、実験系では薬物代謝酵素・トランスポーターの個人差要因解明に向けて遺伝子多型、エピジェネティクス、microRNAに着目した検討を行っています。解析系では、臨床試験、TDMデータの解析に加え、臨床検査値のみを用いたPK/PD解析を新たに行うようになりました。

教室メンバーは、博士課程がD2の江口さん、深江さんに、薬剤師免許取得コースに進学したD2の西野さん、西島さん、D1の五反田君、加唐君。さらに、社会人博士課程の武知さんと他6名を加えた計13名が在籍しています。修士課程はM2の児玉君、田中君、舞さん、王さん、M1の武居君、徳本さん、水永さんです。創薬科学科の4年生、木下さん、安井君、山本君は来年度、動態の修士課程に進学します。

臨床薬学科の6年生、山元さん、江崎さん、島添さん、楢木さん、藤田さんは卒論発表・薬剤師国家試験に向け、研究と勉強を両立させて頑張っています。5年生の原田さん、重松さん、前田奈津美さん、渡邊さんは現在病院・薬局実習中で、4年生の柏原君、館村さん、鶴山さん、前田梓沙さんはOSCEとCBTに向けて日夜勉強に励んでいます。来年度からは、田中君が博士課程に、舞さんが薬剤師免許取得コース

に進学する予定です。この他、解析ゼミもこれまで通り活動中です。

研究室のメンバーや最近の写真、研究室の業績については動態のホームページに随時更新していますので、ぜひご覧になってください。(http://doutai.phar.kyushu-u.ac.jp/ 参照) 卒業生の皆さま、お近くにお越しの際は、ぜひ研究室にお立ち寄りください。最後になりましたが、皆さまのご活躍とご健勝を一同心よりお祈り申し上げます。



臨床育薬学分野

卒業生の皆様、いかがお過ごしでしょうか？臨床育薬学分野は平成25年で5年目を迎えました。今回は、研究室の近況をご報告させていただきます。

現在、島添隆雄准教授、窪田敏夫准教授、小林大介助教の御指導のもと、日夜研究に勤しんでおります。先生方3名は相変わらずお忙しいご様子です。ご存知かとは思いますが、先生方は実務家教員として九州大学病院での実務実習の指導も行っておられます。また、10月からは来年度の病院・薬局実務実習に向けた事前学習が始まり、九州大学病院ウエストウイング4階の臨床薬学教育センターにて臨床薬学科4年生とともに日々奮闘しておられます。

今年は3月に岩切詩子さんが博士(薬学)の学位を取得されました。当分野の新たな博士課程大学院生として、今年度4月より岩田直大さん、山川裕介さんが加わりました。これにより、当分野に所属している博士課程大学院生は、小柳香織さん、一木裕子さん、俵口奈穂美さん、Mahyさんを含め6名となりました。臨床薬学科6年生は石原絵理、打越英恵、菅原尚子、住吉谷恵理、中村雅子、松浦徹、5年生は内田愛子、徳永孝子、米澤まほろ、そして、4月から配属された4年生は大園沙保子、岡雄平、河野吟美、土持有希、三浦智子の14名となりました。当臨床育薬学分野は、教員3名、学生20名の総勢23名と大所帯になり、非常に賑やかな研究室となりました。

今年はおめでたい話もありました。6月に窪田准教授がご結婚され、研究室に幸せな空気を運んでくれました。結婚式同日、臨床育薬学分



野同門会の第2回目も開催され、研究室のメンバー全員で盛大にお祝いすることができました。

以上、簡単ではございますが臨床育薬学分野の紹介をさせていただきました。卒業生の皆様、近くにお越しの際には是非お立ち寄りください。皆様の益々のご活躍とご健康を心よりお祈り申し上げます。

■ ■ ■ 薬剤学分野 ■ ■ ■

薬剤学分野(旧 製剤設計学分野)の卒業生の皆様には、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

薬剤学研究室は、2005年4月より大戸茂弘教授が着任し、「薬を作り、よりよく育てて、正しく使うための創薬・育薬研究」、「体内時計の分子機構を基盤にした創薬・育薬研究」というテーマを掲げ、日々取り組んでいます。2014年11月7日(金)～9日(日)には、九州大学医学部百年講堂にて第21回日本時間生物学会学術大会の会長を大戸教授が務めます。「時間生物学の進歩と新たな展開：異分野連携」とテーマを掲げ、今後の時間生物学研究の深化と新しい学術領域の開拓を目指します。また、2013年10月に開催された日本薬物動態学会での小柳悟准教授の奨励賞受賞をはじめ、研究成果も着実に実を結んできています。

現在、薬剤学研究室は教授の大戸茂弘、准教授の小柳悟、助教の松永直哉の3名に加え、ポスドクの楠瀬直喜、大学院生博士課程7名、修士課程6名、学部学生10名から構成されています。ポスドクの楠瀬と博士課程2年の濱村は日本学術振興会特別研究員です。

続いて、メンバーの近況をお知らせします。

博士課程3年の岡崎、小田、柿本は、研究室の中心メンバーとして日々の研究と後輩の指導に全力を注ぎながら、博士論文発表に向けて追い込み中です。博士課程2年の濱村は薬剤師免許取得コースの病院実習・薬局実習で研修を行いながら、研究室の運営に携わっています。博士課程1年の赤嶺、原、アディラ(留学生)は、研究者としての自立に向けて日々研究に全力を注いでいます。創薬科学科修士課程2年の東、池山、佐々木は修士論文発表に向けて追い込み中です。修士課程1年の片宗、古市、渡邊は研究室行事の企画や就職活動と、充実した毎日を過ごしています。創薬科学科4年の金光、木村、谷口は自身のテーマも決まり、先輩方の指導のもと卒業論文に向け取り組んでいます。薬剤師コースである臨床薬学科6年の白水、徳重は11月末には卒業論文発表、3月には国家試験と多忙な中研究を行っています。臨床薬学科5年の権藤、鶴留、橋本は病院実習・薬局実習で研修中です。臨床薬学科4年の清水、吉田は講義、教養試験等で必死に勉学に励んでいます。

各々がそれぞれの研究テーマを持ち、日々奮闘している一方で様々な行事にも積極的に参加しております。2012年の秋には、悲願であったテニス大会とソフトボール大会のダブル優勝を達成することができました。2013年はディフェンディングチャンピオンとして、2年連続のダブル優勝にチャレンジしたいと思っております。

これからも「薬剤学教室」の伝統を継承しつつ、創薬・育薬の観点から新しい研究分野の開拓に邁進して参ります。卒業生の皆様も近くにお越しの際には是非気軽に当研究室にお立ち寄りください。また、当研究室のホームページが新しくなりました。是非ご覧ください(<http://yakuzai.phar.kyushu-u.ac.jp/>)。

最後になりましたが、皆様の益々のご健康とご活躍をお祈りいたします。

■ ■ ■ 薬理学分野 ■ ■ ■

朝夕冷え込む季節になりましたが、卒業生の皆様はいかがお過ごしでしょうか。当研究室では、本年度も井上教授をはじめとする先生方のご指導の下、世界トップレベルを目指し研究に邁進しております。

井上教授は薬学研究院長として大変ご多忙にも関わらず、常に学生一人一人のことを思いやり、親身に相談に乗ってくださいます。また、学生の指導も研究もパワフルにこなす津田准教授、学生への手厚いサポートとイクメンを両立される齊藤助教、男気溢れる薬理の大黒柱増田特任助教、スクリーニングのパイオニア山下特任助教、公私共に絶好調な高露学術研究員は自らも研究の最前線に立ちながら、いつも熱心に私たちの研究を導いてくださいます。

クールビューティー博士3年の白鳥、麻酔科医師と新米パパの二つの顔を持つ博士2年の松下は、後輩の指導とご自身の研究にも余念がありません。また、博士課程に席をおきながら薬剤師を目指す上杉と西本は薬理の癒し担当です。修士2年は、財布と頭皮がちよっと寒い岩本、浮世離れしたファッションを展開する川田、宮崎が生んだ天然(ボケ)記念物小嶋の3名で、現在は修論に向けて一気にラストスパートを掛けています。また、現在岡崎ライブ満喫中の古賀、薬理のゆるキャラ富山、実はスイーツ男子松田からなる修士1年の3名はそれぞれの個性を活かし、実験に精を出しています。さらに、白肌が光る大園、乙女心のわかる田島、小さなしっかり者の御厨からなる創薬科学科4年の3名は、実験・宴会でのパフォーマンスを含め、これからの薬理を担うホープです。臨床学科は、目も存在感も大きな長谷川、スナックママの風格漂う富永の6年生を筆頭に、ママと実験の両立を目指す上加世田と笑顔に安定感のある張の5年生コンビ、ほんわかオーラ全開の田中と天真爛漫な豊永の4年生からなり、実験と実習・授業の両立に励んでいます。最後に、音楽と学生への愛に溢れる末宗さんといつでもおしゃれな福迫(旧姓中川)さんは当研究室の運営になくはならない自慢の美人秘書さんであり、いつでも私たちを影で支えてくださっています。このように総勢27名の個性豊かなメンバーからなる多様なチームワークを持ち味に、薬理学分野をより一層盛り立ててまいりたいと思っております。

研究室のメンバーや業績につきましては薬理学のホームページに随時更新しておりますので、ぜひご覧になってください。(<http://yakkou.phar.kyushu-u.ac.jp/>参照)

卒業生の皆様方、お近くへお越しの際にはぜひ当研究室へお立ち寄りください。

末筆ではありますが、皆様の益々のご健康とご活躍を心よりお祈り申し上げます。



■ ■ ■ 薬効安全性学分野 ■ ■ ■

卒業生の皆様、いかがお過ごしでしょうか。

私たち薬効安全性学分野は、今年で設立から11年目を迎えました。今年度より新たに長坂助教が加わり、現在はスタッフ3名、学生12名の計15名で日々研究に励んでいます。心疾患、死細胞の貪食などをテーマとした研究を中心に行っており、真理の解明に向けて全員が一丸となって頑張っています。

黒瀬教授は講義や学会などで多忙な日々が続いておりますが、セミナー等を通して学生とのコミュニケーションを大切に下さっています。研究に対する情熱も御健在で、最近ますますパワーアップされた感があります。

仲矢准教授は昨年度の12月1日付で准教授に昇進され、その後英国科学雑誌Nature Communicationsに研究論文を発表されるなど研究室を力強く引っ張って下さっています。

長坂助教は実験に関してだけでなく、私たち学生の研究室生活も日々熱心にサポートしてくださっています。貪欲に実験に取り組む姿は、私たちにとっても非常にいい刺激となっています。

続いて学生の紹介です。エジプトからの留学生である博士3年のIslamさんは、博士課程修了へと向けラストスパートをかけています。今年度より博士課程へと進学された博士1年の渡さんは、論文も無事にAcceptされ修士課程で培ってきた手技と知識をフルに生かしつつ膨大な実験量をこなされています。学部6年の小宮さん、修士2年の高嶋さん、西原さん、西田さんは卒業を控え、より一層研究に取り組んでいます。修士1年は西、三嶋です。西は共同研究でフランスに留学しており、三嶋が幹事学年としての仕事を行っています。学部4年は大場、大原、梶木、松田の4人です。研究室にも慣れてきたようで、それぞれの研究テーマの解明に向けて丁寧に実験に取り組んでいます。

以上、少数精鋭で世界トップレベルの研究を目指し日々頑張っています。お忙しいかとは思いますが、お近くにお越しの際は研究室までぜひお立ち寄り下さい。

卒業生の皆様のご健康と益々のご活躍を心よりお祈りいたします。

文責：西・三嶋

■ ■ ■ 蛋白質創薬学分野 ■ ■ ■

卒業生の皆様、いかがお過ごしでしょうか。

現在の蛋白質創薬学分野は植田教授、阿部准教授、白石助教のご指導のもと、研究員の吉富さん、博士課程：荒牧、濱崎、井川、中村、久保田、修士課程：鶴田、中野、藤山、渡辺、下川、永井、藤崎、学部生：藤田、深松、菊池、香田、森谷、研究生：植田の総勢22名で構成される大所帯ということもあり、実験室は日々賑やかで、文字通り熱気に包まれることもしばしばです。扱う蛋白質もDNA複製系や受容体、酵素に抗体など様々ですが、お互いが時に励まし、時に助け合いながら一丸となって研究に取り組んでおります。

また、今年度は外部から様々な分野の方をお招きしてご講演いただくことも多く、蛋白質研究の最前線を勉強させていただき、自らの研究が描く将来像を考えるいい機会となりました。

もちろん研究のみに限らず、テニス合宿やソフトボール大会などスポーツ行事にも盛んに取り組み、スポーツ王国免疫の復興に励んでおります。その甲斐あってか、数年ぶりにテニス大会の決勝リーグに進

出できるようにもなりました。

2012年末に開かれた植田研究室10周年記念式典に参加された皆様につきましては、現在のご活躍のほどや当時の研究室の様子、私共に向けた数々の激励など貴重なお話を聞かせていただき誠にありがとうございました。これからも、薬品製造工学、免疫薬品学から続く伝統を受け継ぎ、研究にスポーツに皆で切磋琢磨し励んでいく所存です。

最後になりましたが、皆様の益々のご健康とご活躍を心よりお祈り申し上げます。



■ ■ ■ 病態生理学分野 ■ ■ ■

コラボステーションIの8階にある病態生理学分野では、准教授・野田百美の下に現在、在籍している学生は、博士課程3年(毛利優希)、修士2年(山藤芽実)、修士1年(劉 佳黛、吉村 卓馬)、臨床コース6年(花田麻美、東智恵里)、臨床5年(小島 佑一郎、上土井 太志)、創薬コース4年生(井上 太海、朝長 大地)の10名と、イェメンからの国費留学生モハメド・アルヤーリ氏です。

本研究室では、グリア細胞の生理学・病態生理学を基本に、主に脳の免疫細胞であるミクログリアの病態生理学、および、肺がん脳転移の脳内微小環境の研究を行っています。また、新規メディカルガス・分子状水素の神経保護作用の研究も行っています。こちらの方は国内では広く世間の関心を引き付けているようで、九州大学シーズ集のページをご覧になると、アクセスランキングTOP3のナンバー1に挙げられています。海外で講演すると、質問の嵐です。

本研究室における教育活動としては、地道な神経科学・化学分野の基礎研究に邁進するだけではなく、学生の(国際的)視野を拡げ、世界で通用する研究者育成を目指し、積極的に他の研究室との共同研究、研究会参加、および海外への出向を推奨しています。(実はスタッフが私一人で、面倒見きれないからでもあります……)平成25年度は、修士1年に進学してきた2名のうち、吉村君はスペイン・ビルバオ大学へ5か月間出向、アルツハイマー病のヒト死後脳の病理解析・病態生理学を学び、劉さんは国立台湾大学のサマートレーニングキャンプに1か月余り参加して、神経科学分野のあらゆる実験技術法について学んで参りました。それぞれ、ひどく叱られたり(何と言われているのかわからないのが更に火をつけ……)、文化・歴史の軋轢に苦しんだり、大層有意義な人生勉強をしてきたようです。これまで、ぬくぬくと育ってきた彼らにとっては、おそらく初めて社会の厳しさを目の当たりにしたことでしょう。

学生たちは、最近、薬学部のテニス大会に参加し始めました。勝敗はとてご報告できるものではないようですが、学問にスポーツに、何でもチャレンジするのはいいことです。研究室の種々のイベント、誕生会なども定着してきましたし、学生には社会に出る前のつかの間の楽しい人生を謳歌してほしいと思っています。

卒業生の皆さま、お近くにお立ち寄りの際は、どうぞお気軽にお越しください。水素の話など、何でも質問にお答えいたします。

(執筆、野田 百美)



病態生理学分野のメンバー (2013年5月15日)。
学振特別研究員、秋元望さんの送別会にて。

分子生物薬学分野

日増しに寒さが加わってまいりましたが、卒業生の皆様方はいかがお過ごしでしょうか。

現在、総勢17名が一丸となり日々研究に邁進しています。今年、D3の加生は優れた成績を修めたことが認められ、早期卒業により博士号を取得しました。10月からは助教に就任し、学生の指導にも力を入れています。秘書には新たに川上助教の知人であり合唱仲間の花田貴子さんを迎え入れました。昨年まで助教として在籍されていた末次先生は今年の4月に立教大学に准教授として着任されました。また、秘書の尾立(旧姓：松永)も出産に伴い、退職されました。

今年度は3報の論文が採択され、特にDNAクランプに結合する染色体分配調節因子であるCrfCに関する論文では10年来の努力が見事に実りました。CrfCは今年の四年生のテーマの一つにもなり、今後は染色体の複製と分配を連結させる新たな制御機構の解明に拍車をかけて取り組みます。また九重の研修所にて医・農・理学部と共に行われる西風塾研究発表会では、回を重ねるごとに白熱した議論を行っています。

学生実習では川上助教の尽力によって最新の遺伝子工学技術を取り入れた新たな試みも行いました。M1が中心となり準備から指導まで目の回る忙しさでしたが、学部生に最新の研究現場を体験してもらうことで、当研究室の魅力を存分に感じ取ってもらえたと思います。今後も片山教授らの烈々たるご指導の下、「段階的発展、新たな基盤形成、新たな飛躍」を目指し、引き続き研究を行なっていきます。

研究・教育活動に限らず、研究室での行事も行われています。夏の講座旅行ではM1たったの希望で大阪を訪れました。通天閣や天王寺動物園を観光し、名物のお好み焼きに串かつと、食い倒れの街を堪能しました。



これからも切磋琢磨の精神で研究室を盛り上げていきたいと思えます。最後になりましたが、卒業生の皆様のご健康とご活躍を心よりお祈り申し上げます。

分子衛生薬学分野

卒業生の皆様、いかがお過ごしでしょうか。早速ですが本年度の分子衛生薬学分野の紹介をさせていただきます。

今年度は9月中旬に「フォーラム2013 衛生薬学・環境トキシコロジー(実行委員長 山田英之教授)」が九州大学医学部百年講堂で開催され、我が分子衛生薬学分野が実行委員会本部として学会運営にあたりました。先生方は事前の準備で毎日遅くまで大変忙しそうにされておりました。当日は学生も会場設営や受付などに奮闘し、2日間の学会を盛会として終了することができました。また、現在他大学でご活躍中の衛生出身の先生方にも多大なるご協力をいただきました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

さて、それでは研究室メンバーの近況です。教授の山田先生は相変わらずお忙しそうにされています。ついに病院キャンパスから喫煙所がなくなってしまったため、どこもなく寂しそうです。准教授の石井先生は11月に第6回臨床薬理研究振興財団研究大賞を受賞され、学生の指導や授業などにも益々熱心に取り組まれています。助教の武田先生は毎日学生を鼓舞しつつ、ご自身も朝から晩まで実験に大忙しです。精力的に論文の執筆もされています。テクニカルスタッフの神村さんは、学生の心の支えとして研究室を盛り上げてくださっています。

このような先生方のもと、現在社会人博士を含めて16人の学生が所属し、日々研究に勤しんでおります。博士2年の宮内と藤井は学生の最年長として、後輩のお手本になれるよう頑張っています。修士2年の中村・藤木はそろそろ修論に向けて実験のラストスパートです。修士1年の木村・小宮・服部は幹事を頑張るとともに、お互いに切磋琢磨しつつ熱心に実験に取り組んでいます。学部4年の江越は来年度は修士課程へ進学予定であり、碓塚・森は来年からの社会人目指して奮闘中です。また、臨床6年の仮屋菌・5年の小野村・4年の橋田も毎日授業に実習に実験にと頑張っています。

最後になりましたが、卒業生の皆様のご健勝とご活躍を心よりお祈り申し上げます。



講座旅行 湯布院にて

生体分析化学分野

生体分析教室をご卒業された諸先輩方、いかがお過ごしでしょうか。私たち、生体分析化学教室は現在、王子田教授のもと、総勢25人

で日々研究に熱心に取り組んでおります。メンバーの近況を報告させていただきます。生体分析教室の教授として4年目になりました王子田教授は、毎日夜遅くまで学校に残り研究に励んでおられます。王子田先生はIKEAの家具がお気に入りらしく、今では教授室にスウェーデンの風が吹き込むようになりました。浜瀬准教授は、日本中だけでなく世界中を飛び回り、ご多忙な日々を過ごされています。また、教室へのハイセンスなお土産も欠かさず買ってきて下さり、学生一同感謝の気持ちでいっぱいです。中園助教は朝早くから研究に精を出される一方で、トーク力も健在で毎日教室を笑い声で満たして下さっています。特任助教かつ一児の父である田畑さんは、バイオテクノロジーのスペシャリストであり、時折子煩悩な一面を出してきます。また、今年特任助教に就任された三次さんはHPLC班の模範であり、学生からの尊敬を集める聖母のような存在です。合成班にPDとして着任された進藤さんは強面スキンヘッドのマッチョですが、笑顔の素敵な心優しいマッチョです。また学生は、D3の高嶋さんを筆頭に、社会人Dの唐川さん(旧姓江藤さん)、D2の大山さん、メガネの押川さん、古賀さん、D1の熊手さん、官僚候補の池上さん、M2の中内さん、木下さん、高平さん、国家試験の近いB6の草野さん、M1の鬼ヶ原さん、川越さん、淵田さん、M1からLC班に配属された米永さん、中国からの留学生冷さん、薬局実習中のB5の横井さん達が所属しております。また、新メンバーとして、石郷さん、鐘ヶ江さん、青山さん達が今年から加わり、ますます研究室が賑やかになりました。

最近の話題としては、B6の草野さんがモレキュラーキラリティ2013で優秀ポスター賞、M1の川越さんが第50回化学関連支部合同九州大会で九州分析化学ポスター賞、「第31回九州分析化学若手の会」でM1の鬼ヶ原さんが「九州分析化学若手賞」を受賞しました。教室の詳しい様子はホームページ上でもご覧になれますので(<http://bunseki.phar.kyushu-u.ac.jp/>)、こちらも直しくお願いします。以上、研究室の紹介をさせて頂きました。最後になりましたが、皆様の益々のご活躍とご発展を心よりお祈り申し上げます。

■ ■ ■ 環境調和創薬化学分野 ■ ■ ■

卒業生の皆様、いかがお過ごしでしょうか。

当研究室では2010年4月より大嶋教授が就任され、また2010年7月には森本助教が就任されまして、環境調和創薬化学分野と名称を変更し新しいスタートを切りました。2012年4月には新たに矢崎助教を、12月には秘書の有村さんを、2013年4月には渡辺特任助教を迎え、教員・スタッフ5名、博士課程5名、修士課程9名、学部生7名の総勢26名で日々研究に励んでいます。本研究室では現在、環境調和型触媒反応の開発や、様々な生物活性化合物の合成を行っています。学会発表や論文執筆なども活発に行い、各々の研究が実を結んでいます。

さて、続いて研究室の近況を述べさせていただきます。大嶋教授は授業や出張、学会参加など多忙を極めている中、実験報告、文献紹介、週間報告などでは熱心に指導して下さり、暖かく励まして下さいます。その一方、バドミントン大会では誰よりも奮闘し、アキレス腱を切るほどの活躍を魅せて下さいました。また、講座旅行などでは皆を盛り上げてくれる元気いっぱいお茶目な先生です。森本助教はいつも家に帰っているか分からない研究室の主で、学生にはいつも時間を惜しまず丁寧にアドバイスをさせていただきます。矢崎助教は真剣な眼差しで研究に取り組む一方、飲み会では学生と冗談が言い合える親しみやすい先

生です。渡辺特任助教は抜群の運動神経で研究室対抗スポーツ大会でも活躍して下さいました。秘書の有村さんはいつも明るく気を配って下さる頼りになるお姉さんです。一方学生は、毎日遅くまで研究に励む博士課程の安倉、張、澁谷、清水、劉。修士論文に向け、奮闘中のM2塚本、藤本、森崎、横手、李、林。卒論に向けラストスパートB6本田、藤原。幹事に授業に学会に大忙しM1上杉、澤、野下。病院実習まっただ中の臨床B5洪田。研究室にも慣れ、卒業発表に向け頑張るB4中武、掘河、向井。CBT、OSCEを控え、授業も研究も一生懸命な臨床B4田村。徐々に人数も増え、研究室もにぎやかになりました。

以上、簡単ではございますが、環境調和創薬化学分野の近況を報告させて頂きました。最後になりましたが、卒業生の皆様も近くにお越しの際は研究室までお気軽に足をお運びください。



■ ■ ■ 薬用資源制御学分野 ■ ■ ■

卒業生の皆様、いかがお過ごしでしょうか? 私たちの研究室の近況をお知らせします。

まず、今年の6月に田浦太志助教が富山大学へと栄転されました。田浦助教の益々のご活躍を願っております。そして、今年の10月から私たちの研究室の卒業生である坂元政一さんが助教として戻って来られました。とても優しく学生と接して下さり、益々良い研究室になることを期待せずにはられません。

続いて、スタッフおよび学生の紹介をさせていただきます。

森元教授はいつも夜更けから研究室に来られ、熱心に研究されています。田中准教授はまるで神様かのように学生を温かく見守ってくれています。

博士課程は、タイからの留学生のベンヤカンさんとフィンチさん、ネパールからのとってもキュートな留学生マダンさん(D2)、知識が豊富で優しいお姉さんの片山さん(D2)の4名が在籍しています。

修士課程は、白衣と保護メガネがとてもお似合いの常浦さん(M2)、研究室で一番ふつうな加藤さん(M1)、研究室一番の自由人の中島さん(M1)の3名が在籍しています。

臨床薬学科は、研究室の影の支配者である戸切さん(B6)、かわい後輩に囲まれて幸せそうな山村さん(B6)、お酒さえあれば幸せな堀くん(B5)、3次元よりも2次元黒髪ツインテールが好きな宮崎くん(B5)、そしてひたすらチップ詰めをする25歳安楽くん(B4)の5名が在籍しています。

創薬科学科は、セレブという言葉が世界一似合う松浦さん(B4)、研究室でスーブ屋さん始めました松尾さん(B4)、カイコを溺愛している小さな男子の山脇くん(B4)の3名が在籍しています。

このようなメンバーで日々楽しく研究生生活を送っております。お時

間あるときはぜひ研究室にお立ち寄りください。



細胞生物薬学分野

卒業生の皆様、お変わりなくお過ごしでしょうか？

当研究室では、田中嘉孝教授のご指導の下、日々実験に励んでいます。

現在は、1) 膜タンパク質の輸送および分解の分子制御機構の解明、2) 癌細胞表面抗原の細胞内動態に関する研究、3) メラノソームの形成機構に関する研究（美白の科学）、4) 皮膚老化の研究 などをしています。

さて、以下に簡単なながら研究室のメンバーを紹介させていただきます。教授の田中先生は、相変わらず朝から夜遅くまで、学生の指導に、研究アイデアの捻出にと忙しい日々を過ごしていらっしゃいます。ディスカッションでの的確なご指導には研究室一同身がひきまされる思いです。週末は、家庭菜園に精を出していらっしゃるようで、畝で畑を耕して手にはマメができるほどです。准教授の西村先生は、授業に、実験にと精力的に仕事をされています。助教の藤本先生と本年度の7月に助教に着任された廣田先生は、学生の指導に実験に大忙しの日々を送られています。社会人博士課程の田代さんは、最終学年となり、学位取得に向けてラストスパートされているそうです。修士2年の富永君、松木君は、なかなか良い結果がでず悪戦苦闘の日々を過ごしているとのことです。創薬4年の梅田君、太田君、中島さんは、まだまだ慣れない実験にパニックに陥ることも多いですが、めげずに日々頑張っています。臨床4年の佐藤さん、末弘さん、徳重さんは、OSCE、CBTに向けた演習や勉強に追われながらも、実験も頑張っています。

このようなメンバーで今後も研究生活に邁進し、研究室をもち立て、細胞生物学の分野に多少なりとも貢献できるよう日々邁進していく所存であります。お近くにお越しの際はぜひ、当研究室にお立ち寄り下さい。

最後になりましたが卒業生の皆様におかれましては、ますますの御繁栄をお祈りすると共に、今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

機能分子解析学分野

卒業生の皆様、いかがお過ごしでしょうか。修士1年の井手卓月と申します。本年度の機能分子解析学分野のメンバーの紹介と近況報告をさせていただきます。

山田健一准教授の優しさ溢れる笑顔に満たされている研究室では、メンバー全員楽しく研究に邁進しております。安川圭司助教は、新システム研究にお忙しい中、温かいご指導をさせていただきます。

今年は酒井先生を迎え、有機合成チームが一層発展しています。酒井先生はいつも鉛をくれて、面白いお話をしてくれるので私の癒しです。学術研究員の山崎さんは、合成の神である一方、学生全員の指導をし

てくださりとても頼りになるお方です。D2のトンさんは都合の悪い日本語だけ分かりませんがそのユーモアで笑いをおこし、人の良さで皆に慕われるリーダー的存在です。D1の松岡さんは現在大阪でタフさを発揮中で、さらに最強になって帰ってくるとのことなので楽しみです。山中さんは、国家資格取得の勉強に励みつつ、論文を読み漁り研究室の頭脳として活躍中です。臨床6年の峰さんは、実験に励む一方で周囲への配慮が素晴らしく研究室の管理が成り立っているのは彼女のおかげといっても過言ではありません。修士1年は私と白水君で、白水君は春に大事故にあって心配しましたが、今では日夜研究に励んでいるので安心しました。そして臨床5年の安定の大榎君は実習を終え、帰ってくる頃なので待ち遠しいです。さらに今年は学部4年生（しっかり者の雑賀さん、のんびり賢い式町君、お弁当男子日下部君、ダイエット中の中村さん）の新メンバーを迎え、バランスの良いキャラクターたちで和気藹々としております。夏には、講座旅行で伊王島に行ってお参りました。大自然に囲まれて海水浴や卓球大会を楽しみ仲の良さは倍増されました。

以上、簡単にはありましたが、本年度の機能分子解析学分野の近況を報告させていただきました。卒業生の皆様におかれましては、ご多忙な日々をお過ごしのことと存じますが、近くにお越しの際には研究室の方にも是非お立ち寄りください。



創薬育薬産学官連携分野

朝夕の冷え込みがいっそう厳しくなり、銀杏の香りも懐かしくなる今日この頃、皆様いかがお過ごしでしょうか。当研究室は平成24年度に発足し、今年で2年目となります。私たちは生体が心血管機能の恒常性を維持するメカニズムを内分泌制御タンパク分子、心循環組織由来の初代培養細胞、遺伝子改変マウスなどを用いて多階層レベルで統合的に理解することを目指しています。また製薬企業や病院との連携により心血管機能を改善させる革新的医療基盤技術の開発や既承認薬の適応拡大を推し進めています。特に九州大学病院との繋がりは強く、循環器医療における薬剤師の現状理解と貢献拡大を目指した研究をさせていただいています。今夏から西田准教授が自然科学研究機構岡崎統合バイオサイエンスセンター（生理学研究所）の教授として異動されました。福岡を離れた後も毎日のように電話で連絡を取り合い、情熱的な言葉や鋭い指摘をさせていただきます。また今年からTT助教として着任された富田先生も、子育てに追われながらも私たちに様々なアドバイスを下さり、ときには夜遅くまで一緒に残って指導してください。現在は新しい研究室の立ち上げに奮起されているメンバーと連携を取りながら、富田助教を中心にポスドク1名、博士課程大学院生5名、修士課程大学院生1名、学部学生5名、秘書さんも含め総勢14名で切磋琢磨し、一丸となって研究に取り組んでいます。当

研究室は、アイデアと熱意さえあればどのような分野にも挑戦しているという姿勢で取り組んでいます。研究テーマや学内外との連携その他なんでも、当研究室に興味がありましたらいつでも遠慮なくお立ち寄りください。多くの皆様の温かいご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。(文責・松尾友樹)



■■■ 生物有機合成化学分野 ■■■

卒業生の皆様いかがお過ごしでしょうか？

今年度の生物有機合成化学分野は、6月に「第23回万有福岡シンポジウム」、11月に「第39回反応と合成の進歩シンポジウム」と2つのシンポジウム運営に携わりました。研究室一丸となって開催に尽力すると共に、講演を聴き有意義な時間を過ごす事ができました。特別講演は興味深く魅力的なものばかりで、研究の精神、目的を達成するまでの過程の丁寧さなど学ぶ所が多く非常に勉強になりました。

さて研究室では、多忙な日々を送られている佐々木教授ですが学生との討論を大切に、ゼミ等では相変わらず活発な意見交換が行われています。助教の谷口と阿部も自らの研究を進めつつ研究室の実質的な運営や学生へのアドバイスなど、20人近くいる学生達の指導にあたっています。

3本鎖グループは、岡村 (D1)、富崎 (M2)、松枝 (M1) の3人でWNA骨格から脱却し新たな局面を迎えています。長く8-oxodGを標的にしてきた酸化損傷グループも8-nitroGなどへ標的を広げ、古賀 (D3)、潤 (D2)、中国人留学生の尹 (D2)、4年制博士課程の渡部 (D1) というドクター陣に加え、菊川 (M1)、大林 (B4)、和田 (B4) の7人体制の主要グループに発展しています。また機能性核酸グループも、生化学的な評価を担当する柴田博士、チェコ人のポストドクJan、實崎 (D1)、秋島 (M2)、朴 (M2)、大城 (M1)、羽田野 (M1)、菊田 (B4) と8人で生物有機の研究発展に貢献しています。研究室設立初期からのテーマhoechstを扱う江田 (D1)、chromomycin A₃を引き継ぐ村瀬 (M2)、heliceneをテーマとする川良 (M2) らは、低分子グループとして新たな展開を目指しています。

先輩方が残した業績や研究室の雰囲気は今も確実に引き継がれております。卒業生の皆様、帰福の際には是非研究室にお立ち寄り下さい。

■■■ 薬物分子設計学分野 ■■■

卒業生の皆様、いかがお過ごしでしょうか。現在、当研究室は、末宗教授と麻生准教授、臼井助教の3名に加え、学生17名(博士3名、修士5名、学部生・研究生8名)の総勢20名のメンバーで構成されています。現在は主に①機能性核酸分子の設計と合成、新規ヘリセン分子の合成と機能性開発、人工アミノ酸の設計とその医薬化学的応用を中心とした研究を展開しており、学生一人ひとりが独立したテーマの

も日々研究に励んでいます。博士課程2年の山本氏は今年度の九州大学アカデミックチャレンジ研究助成に採択され、また来年度から学術振興会特別研究員として採用が内定しています。

さて、研究室メンバーの近況ですが、末宗教授は年々体調が回復されているようで、セミナーの度に学生と熱いディスカッションをされています。麻生先生は相変わらずご多忙のようですが、いつも笑顔で優しく、また時には厳しく学生の指導をされています。臼井先生は新テーマの捻出など常に頭をフル回転させていますが、趣味でフットサルをなさるなどメリハリのある生活を送られています。博士課程2名は限られた時間の中、よりよい成果を出そうと奮闘しております。修士2年の3名、学部6年生1名は修論、卒業研究発表に向け、追い込みをかけているところです。また、今年配属された4年生3名は皆努力家で、下の学年から研究室を盛り上げようと頑張ってくれています。

研究室の行事として、夏には講座旅行で壱岐を訪れました。あいにくの雨模様ではありましたが、ガイドさん付きの貸切バスで、壱岐の歴史を学び、おいしい料理を楽しむことができました。お酒の力も相まって、研究室の親睦を深めることができたのではないかと思います。

最後になりましたが、卒業生の皆様もお近くにお越しの際は、ぜひ研究室にお立ち寄りになり、人生の先輩として有意義なお話を聞かせて頂きたいと思っております。皆様の益々のご活躍とご健康をお祈り申し上げます。



■■■ 医薬細胞生化学分野 ■■■

卒業生の皆様いかがお過ごしでしょうか。研究室の近況を修士1年の都地がご報告させていただきます。当分野では、藤田教授、宮本准教授、田中助教、杉本助教、そして今年度から、フランス留学を終え、新たに就任された吉田助教のご指導の下「染色体機能制御の分子機構解明とその制がん研究への応用」及び「分子標的薬を含めた創薬のリソースとしての天然化合物研究」のテーマの元で、日々研究に励んでおります。現在は、杉本助教が産休・育休を取られています。来年度の4月には復帰される予定です。

それでは簡単に研究室のメンバーの紹介をさせていただきます。藤田教授、宮本准教授、田中助教、杉本助教、吉田助教、D2が2名、M2が4名、M1が5名、B5が1名、B4が3名の総勢20名です。D2はフランスさん、會澤さんで、休日返上で日々研究に没頭しております。M2の大平さん、向門さんは無事就職先も決まり、後は論文執筆を残すのみです。同じくM2の渡邊さんは、博士課程への進学を志し、先生と熱く議論を交わしております。同じくM2の李さんは天然物の研究に日々邁進しております。M1の岩崎、榎谷、都地は研究生生活にも慣れ、実験や就活に忙しい毎日を送っています。また、同じくM1のキンケラさん、白さんは院試にも合格し、研究に加え日本語の勉強も頑張っています。B5の田中さんは病院実習に研究室の実験と

大変ながらもキッチリとこなしております。B4は、嘉山、國吉、倉重の3人で、先輩に怒られつつ、慣れない実験を一生懸命こなしています。簡単な紹介となりましたが、私たちは今後とも研究に、日々精進していく所存です。これからも当研究室をよろしく願いいたします。

■ ■ ■ 機能分子合成化学分野 ■ ■ ■

卒業生の皆さんお元気ですか？今年度の機能分子合成化学分野の紹介をいたします。4月に新4年生として3名のメンバーが新たに加わりました。これら新人の紹介を中心にお伝えします。岡本優菜さんは、毎日佐賀市から通学しているのも関わらず、誰よりも早く学校に来てたくさん実験をしている頑張り屋さんです。時折、フランス帰国の片鱗を垣間見ます。続いて堅山大康君です。テニスやテコンドーなどをこなすスポーツ万能タイプです。性格はいたって温厚で少々ナイーブな点が自分でも気になるみたいです。実験では卒業生の大久保研吾さんが行っていたポルフィリン誘導体を用いたMRI造影剤開発を行っています。最後に萩原隆介君です。堅山君と同様に鹿児島鶴丸出身の薩摩っ子？です。見た目と同様に実験は「光モノ」の研究を行っています。外部刺激に応答する蛍光体の実験で、面白い結果がぼちぼちでてきている段階です。最後に今年度講座旅行の紹介です。修士1年小川開君と藤堂潤一君が企画した山口巡りの小旅行に行ってきました。10月初めのやっと思暑さも和らいだ時期に、秋吉洞の静寂で荘厳な雰囲気を感じ、湯田温泉の湯にさんざん浸かり、下関のおいしい魚を堪能しました。写真は下関唐戸市場でのひと時です。古賀研究室もそろそろ20年を迎えます。皆様のお立ち寄りをお待ちしています。



■ ■ ■ 医薬品情報解析学分野 ■ ■ ■

卒業生の皆様、いかがお過ごしでしょうか。昨年度は、皆様のたくさんのお出席により盛大に大石先生の退職のお祝いをする事が出来ました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。現在は、9月に京都大学医学部附属病院薬剤部から増田智先先生が新たに着任され、新体制で研究に励んでおります。研究室の構成は、教授・薬剤部部長の増田先生、准教授・副薬剤部部長の江頭先生、そして試験研究室の矢野先生・山田先生・川尻先生、学生は博士課程3名（D2：牛尾・堤、D1：坂本）、学部学生14名（B6：桑原・藤田・光安・山本、B5：上田・小澤・要・花田・森田、B4：小野・瑞慶山・竹下・馬場・樋口）です。増田先生は、TDM、腎臓、トランスポーターのスペシャリストで、より一層レベルの高い研究が出来ると感じています。研究内容は、これまでと同様に薬学部協力講座として薬剤部職員のもと臨床現場で問題となっている副作用について研究を行っています。特に抗が

ん剤による神経障害・血管障害、薬剤性腎障害、腎機能バイオマーカーの探索といったテーマを中心に行っています。どのテーマも悪戦苦闘しておりますが、研究成果が皆様の耳に届くように研究に励んでいます。なんと来年は博士課程進学者が3名おり、博士課程総勢6名の予定です。研究室の机が足りないのでは？という嬉しい心配をしています。簡単ですが、来年博士課程の学生を紹介します。高尿酸血症に悩まされている牛尾、体重増加が激しい堤、カレーが苦手な坂本、テニスのインストラクター桑原、通称アジアの壁（身長187cm）の藤田、コーラ大好きな山本の6名です。来年の博士課程はみんな男ばかりですが、お互い刺激し合い、良い雰囲気の中で研究をしています。

最後になりましたが、卒業生の皆様、是非とも近くに立ち寄りの際は研究室に足をお運びください。皆様の今後ますますのご活躍とご健康をお祈り申し上げます。

■ ■ ■ 創薬腫瘍学講座 ■ ■ ■

皆様いかがお過ごしでしょうか。

私共の創薬腫瘍学講座は平成19年5月に開講して以来、早7年目となりました。我々の研究室は①血管新生や炎症性細胞浸潤、リンパ管新生などの“がんの間質応答”を標的としたがんの悪性進展を抑制する創薬研究と②分子標的薬の個別化治療の基礎基盤を構築する上で薬剤の獲得耐性のメカニズムに関する分子腫瘍学研究の2つをメインテーマに日々研究を進めています。

現在の教職員は教授1名、助教1名、博士2年1名、博士1年1名、修士2年3名、修士1年2名、学部5年1名、研究員1名、秘書1名の総勢12名で研究に励んでおります。小野眞弓教授は論文作成や実験指導、授業、さらに国内外の学会活動に多忙な毎日を送っていますが、皆が研究の楽しさを感じて実験を行えるように常に考慮しています。そのため皆が自分の研究に責任と自覚を持って取り組んでいます。このような環境のもとで、博士課程の学生は自分の実験以外にも下級生の実験指導なども積極的に行っており、上級生としての自覚が出てきております。また修士の学生は12月に行われる薬学会九州支部大会で初めての学会発表を控え、自分の研究を進めるために積極的に実験や勉強を行っていて、実験台やクリーンベンチなどの実験機器は順番待ちが出る程です。

創薬腫瘍学講座の研究の目標は、がんの悪性進展や薬剤耐性に関与するメカニズムを明らかにしながら、独自の標的分子や標的細胞を明らかにすることでがん治療に貢献することです。特に当研究室においてはがんの特性を把握するために、がん細胞と周囲環境応答（血管新生、リンパ管新生、炎症反応など）を含むがん間質の両方で標的分子/細胞を探索し、それらのシーズについてがん患者の病理学材料を対象にしてがんの悪性進展との関連性を検討しております。さらにがん悪性進展に関する我々の分子腫瘍学研究に加えて、分子病理学や臨床腫瘍学、さらにバイオ統計学の研究分野と協力して臨床的に有用性のある標的分子を同定して創薬へ結び付けていくところが、私共のがん創薬研究の大きな特徴です。

教室の学生や研究員が各々独立したテーマで研究を進めつつ、互いに協力しながら“新しいがん治療を九州大学薬学研究院から世界へ発信する”ことを目指して、全員一丸となって頑張っております。どうぞこれからも、皆様方からの“創薬腫瘍学講座”へのご支援とご指導を宜しくお願い申し上げます。

叙位・叙勲

【叙勲】

有吉 敏彦 長崎大学名誉教授：

瑞宝中綬章 平成25年4月29日

受賞

渡 公佑（創薬腫瘍科学）：平成23年度日本がん分子標的治療学会 ポスター賞 2012/6/13 N-myc downstream regulated gene-1 (NDRG1) はがん血管新生に重要な役割を果たす

山崎俊栄（機能分子解析学）：第51回電子スピンサイエンス学会年会 優秀発表賞 2012/11/2 2,6位置換ピペリジン系ニトロキシドを用いた脂質ラジカル検出手法の開発

大嶋孝志（環境調和創薬化学）：The Asian Core Program Lectureship Award (The 7th International Conference on Cutting-Edge Organic Chemistry in Asia /The 3rd New Phase International Conference on Cutting-Edge Organic Chemistry in Asia) 2012/12/14 Deacylation of Unactivated Amides to Amines Using Ammonium Salt-Accelerated Transamidation

川上広宣（分子生物薬学）：日本遺伝学会第84回大会 Best Papers賞 2012/12/20 出芽酵母pre-RC形成の精製組み換え蛋白質を用いた試験管内再構成とpre-IC構成因子のリクルートメント

矢崎 亮（環境調和創薬化学）：第29回井上研究奨励賞（助井上科学振興財団） 2013/2/4ソフトLewis酸/ハードBrønsted塩基協奏触媒を用いた直接的不斉炭素-炭素結合形成反応

井上和秀（薬理学）：日本薬学会薬学会賞（平成25年度） 2013/3/27 ATP受容体の生理機能、特に痛みに関する神経薬理学的研究

白石充典（蛋白質創薬学）：日本生化学会九州支部会 学術奨励賞 2013/5/19 免疫反応を制御する受容体の構造および分子認識に関する研究

小柳 悟（薬剤学）：平成25年度日本薬物動態学会 奨励賞 2013/10/10 時計遺伝子を基盤にした薬物動態制御因子の概日変動メカニズムに関する研究

石井祐次（分子衛生薬学）：第6回臨床薬理研究振興財団研究大賞 2013/11/5 薬物応答に関する個体差の新たな機構：CYP3A4とUGTの相互作用によるCYP3A4機能変動

池田恵理子（薬剤学）：九州大学ロバート・ファン/アントレプレナーシップ・センター アカデミックチャレンジ2012に採択 2012/7/9 慢性腎不全（CKD）に伴う生体恒常性破綻機構の解明および新規CKD時間薬物療法の構築

川尻雄大（医薬品情報解析学）：平成24年度日本医療薬学会Postdoctoral Award 2012/10/27抗がん剤による末梢神経障害の発現機序の解明と対応策に関する研究

渡 健治（薬効安全性学）：Best Poster Presentation Award (The 29th Annual Meeting of the International Society for Heart Research Japanese Section) 2012/10/27 β -Arrestin2 in Infiltrated Macrophages Is Essential for Modulating Inflammatory Responses on Myocardial Infarction

坂口瑛美（薬理学）：第65回日本薬理学会西南部会優秀発表賞 2012/11/23 細胞種特異的 STAT3 欠損マウスを用いた神経障害性疼痛の解析

清水悠平（環境調和創薬化学）：優秀発表賞（第29回日本薬学会九州支部大会）2012/12/8トランスアミド化を利用した脱アシル化および脱カルボニル化反応の開発

森崎一宏（環境調和創薬化学）：優秀発表賞（第29回日本薬学会九州支部大会）2012/12/8ロジウム触媒による α -ケトイミノエステルの直接的不斉アルキル化反応

池田恵理子（薬剤学）：第6回次世代を担う若手医療薬科学シンポジウムで優秀発表賞2012/12/12 Molecular mechanism regulating 24-hour rhythm of dopamine receptor D3 expression in mouse striatum

清水悠平（環境調和創薬化学）：平成24年度九州大学学生後援会学術研究賞 2013/3/1

清水悠平（環境調和創薬化学）：平成24年度九州大学学生表彰 2013/3/1

北嶋直幸（創薬育産学官連携）：第86回薬理学会年会（福岡）優秀発表賞 2013/3/21

高露雄太（薬理学）：日本薬理学会第86回年会優秀発表賞 2013/3/23 アストロサイト特異的STAT3欠損は神経損傷後のアストロサイト活性化および神経障害性疼痛を抑制する

清水悠平（環境調和創薬化学）：講演ハイライト集（日本薬学会第133年会） 2013/3/30 トランスアミド化を利用したアミドの脱アシル化反応の開発

張 明（環境調和創薬化学）：優秀発表賞（日本薬学会第133年会） 2013/3/30 Study of Short-Step Synthesis of Kainic Acid via Pt-Catalyzed Direct Allylic Aminations

江口駿介（薬物動態学）優秀発表賞（日本薬学会第133年会） 2013/3/30 ヒトCYP3A4活性の個人差解明

松岡悠太（機能分子解析学）：優秀発表賞（日本薬学会第133年会） 2013/3/30 蛍光ニトロキシドの論理的設計に向けた消光メカニズム解析

草野 尚（生体分析化学）：モレキュラー・キラリティーポスター賞 2013/5/1 高性能パークル型キラル固定相を用いるタンパク質構成全アミノ酸光学異性体の二次元HPLC一斉分析

野村浩子（薬物動態学）：海老原賞（国際TDM学会派遣賞、日本TDM学会） 2013/5/26 カルテ情報を活用した母集団薬効動態解析

原田奈央美（機能分子合成化学）：第23回万有福岡シンポジウムポスター賞 2013/6/1

森崎一宏（環境調和創薬化学）九州大学アカデミックチャレンジ2013研究助成 2013/6/21 ロジウム触媒を用いたケトイミンの直接的な不斉アルキル化反応の開発

山本耕介（薬物分子設計学）：九州大学アカデミックチャレンジ2013研究助成 2013/6/21 [5]ヘリセンのキラリティーを基盤とした多角的な応用研究

岡村秀紀（生物有機合成化学）：第50回化学関連支部合同九州大会 最優秀発表賞2013/7/1 CG 塩基対を選択的に認識可能なN-グアニジノエチルイソシチジンの合成と3本鎖DNA形成能の評価

川越亮介（生体分析化学）：九州分析化学ポスター賞 2013/7/1 AMコンタクト機構に伴う蛍光レシオ変化を応用した細胞内硫化水素の蛍光イメージング

鬼ヶ原弘久（生体分析化学）：九州分析化学若手賞 2013/7/1 キラルアミノ酸メタボロミクスの推進を加速する新規パークル型キラル固定相の設計開発

西原弘朗（薬効安全性学）：研究奨励賞（新学術領域研究「自然炎症」+「脂質マシナリー」合同若手ワークショップ） 2013/7/4 心筋梗塞におけるロイコトリエンB4受容体の役割解析

毛利優希（病態生理）：優秀発表賞（岩谷有希子賞）受賞 第24回霧島神経薬理フォーラム 2013/8/18 ミクログリアを介した甲状腺ホルモンと脳機能連関

西原弘朗（薬効安全性学）：優秀発表賞（次世代を担う創薬・医療薬理シンポジウム2013） 2013/8/31 心筋梗塞時におけるBLT1の役割解明

澁谷亮三（環境調和創薬化学）：ポスター賞（第60回有機金属化学討論会） 2013/9/14 白金-ピロリジン触媒系によるアリルアルコールのモノアリル体選択的直接アルキル化反応の開発

横手友紀（環境調和創薬化学）：優秀ポスター賞（第30回有機合成化学セミナー） 2013/9/18 含窒素複素環配位子を用いた高活性かつ再利用可能な亜鉛触媒の開発

西原弘朗（薬効安全性学）：優秀発表賞（第12回次世代を担う若手ファーマ・バイオフィォーラム2013） 2013/9/18 心筋梗塞時におけるBLT1の役割解明

辰島瑤子（医薬品情報解析学）：平成25年度日本医療薬学会Postdoctoral Award 2013/9/21 抗がん剤による末梢神経障害および悪心・嘔吐に関する研究

ニュース

雑誌化学 2012, Vol. 67 に掲載 「安定なアミド結合を温和に切断！—強酸、強塩基を必要としないアミド切断反応の開発」 清水悠平、森本浩之、大嶋孝志 2012/12

仲矢道雄准教授らの「死んだ細胞を体内で除去する新たなタンパク質を発見～SLEや鉄過剰症治療への応用に期待～」に関する研究成果が「Nature Communications」に掲載（薬効安全性学）日経バイオテク ONLINE、YAHOO ニュースに記事が掲載 2013/2/26、Nature asia から注目の論文として紹介 2013年3月

Dojin News, No146 (Topics on Chemistry) に掲載 「血中アスコルビン酸の簡便迅速な検出：蛍光ニトロキシドの利用」（機能分子解析学）2013/4/18

共同研究成果「綺麗なススメリー」市販 D-アミノ酸を利用する美容食品、資生堂と生体分析化学の共同研究成果が全国で市販化 2013年6月

山田健一准教授の研究課題が戦略的創造研究推進事業（さきがけ）（科学技術振興機構）に採択（機能分子解析学）2013/10/1

大学院薬学府修士課程奨学特別選抜入学者

平成25年度

古市 葉子（薬剤学）
渡邊 美弥子（薬剤学）
富山 大輔（薬理学）
松田 烈士（薬理学）

古賀 啓祐（薬理学）
崎山 友香里（分子生物薬学）
鬼ヶ原 弘久（生体分析化学）

上杉 修平（環境調和創薬化学）
武居 宏明（薬物動態学）
水永 茉梨（薬物動態学）

日本学術振興会 特別研究員 採択者

平成25年度

DC2 安倉 和志（環境調和創薬化学）
DC2 濱村 賢吾（薬剤学）
DC2 測 靖史（生物有機合成化学）
DC2 山本 耕介（薬物分子設計学）
DC1 岡村 秀紀（生物有機合成化学）

DC1 澁谷 亮三（環境調和創薬化学）
DC1 清水 悠平（環境調和創薬化学）
DC1 松岡 悠太（機能分子解析学）
DC1 村島 健介（機能分子合成化学）
DC1 渡 健治（薬効安全性学）

（氏名、配属分野は順不同）

平成25年度 九大薬友会 評議員会議事録

【日時】 平成25年5月11日（土）12時30分より15時00分まで

【場所】 九州大学薬学部 会議室（中央棟2階）

【出席者】 評議員定数：役員17名；クラス評議員62名（重複3名）の合計79名。出席者数25名、委任状40名。

役員：井上和秀会長、岩崎正武副会長、山田健一庶務理事（新）、石井祐次庶務理事（旧）、齊藤秀俊会計理事。

支部長：秋田弘幸（関東支部長）、尾崎 通（関西支部、永繁昌二支部長代理）、北園正人（鹿児島支部長）、菅田哲治（大分支部、赤嶺支部長代理）、野田浩司（福岡支部長）、原田平輝志（長崎支部）、井本修平（熊本支部長）。

クラス評議員：増田義人、菅沼佑子、占部美子、塩川みほ子、小川建志、樋口 俊、赤司俊博、川原 章、古賀信幸、飛松雅代、小野容子、伊東祐二、阿部義人（順不同敬称略）。

会議に先立ち、井上和秀会長より九大薬友会会則第19条1項の評議員会の定足数について説明があり、評議員会が成立したことが述べられた。

また、同条2項に基づき本会の議長は会長であることが説明された。

【報告事項】

- 平成25年度予算で新しい研究棟が立つこと等、九大薬学研究院で現在行われている改革について報告された。
- 平成24年度事業報告
資料に基づき報告がなされた。
- 各支部の活動状況の報告
関東支部、関西支部、鹿児島支部、大分支部、福岡支部、熊本支部の活動状況報告、並びに今年度の活動計画について報告がなされた。

関東支部では、総会の講演会受講により薬剤師研修シールを受けられるようになった。長崎支部では、メーリングリストを作成し現役学生や卒業生の相談窓口を開設して対応する取組が分かち合われた。

【議 題】

1. 役員の改選

平成25年度の役員、支部長、評議員について資料に基づき説明がなされ承認された。

2. 平成24年度九大薬友会会計報告

平成24年度の会計報告がなされた。

植田正監事の監査の結果、問題ないことが報告され、平成24年度会計報告が承認された。

3. 平成25年度九大薬友会事業計画（案）

資料に基づき、平成25年度九大薬友会事業計画案が説明され、計画が原案のとおり認められた。

4. 平成25年度九大薬友会予算（案）

平成25年度予算案の説明が行われ、原案通り予算が承認された。

5. 薬友会あり方検討委員会

第24回生 川原 章氏（東京在住）を中心として、第22回生 赤司俊博氏（福岡在住）がサポートする形で、大学の外からの目で薬友会のあり方を検討していただくことになった。評議員会メンバーでメーリングリストを作ることも決定した。

6. その他

資料に基づき、九州大学病院での人間ドック業務が終了することが説明された。

平成26年度財務破綻が予想されるため、今後の方針について議

論した。

ドラスティックな財務改善策を進めて行くことが基本的に合意された。発送業務の簡略化を目指してメールでの連絡をまず始めて行くことが確認された。評議員会の連絡も郵送料を節約し、メールで行うことが確認された。

70歳以上からの会費徴収は据え置き、篤志の方には薬友会誌発送時等に積極的にご寄附頂くようお願いする。

現役学生の卒業時の連絡先は、実家住所であり、実際には支部からの連絡が機能していない実情がある。卒業時に全員に生涯メールアドレスを取得していただき、それを学生係に届けてもらい薬友会で把握するシステムを構築する。

関西支部では、九大関西オフィスとのTV会議システムを利用して、関西支部の製薬企業勤務の方と現役生との間での相談コーナーを設ける構想がある。関東支部では新卒業生の総会参加費を無料にしており、現役学生も対象に広げている。

今後の薬友会活動について、いろいろな意見が交わされ、活発化させるにはどうすれば良いかの提案が出された。まず、薬友会あり方検討委員会が本評議員会の議論を踏まえて、現役の人に魅力的な薬友会を目指した改革案の素案を11月までに、薬友会あり方委員会でもまとめて評議員間で共有することとなった。

以上

九大薬友会会計報告

平成24年度 九大薬友会決算	
【収入】	
薬友会入会金 (6000円×59口)	354,000円
年会費 (3000円×824口)	2,472,000円
UFJニコスカード (3000円×70口)	210,000円
預金利息	131円
小 計	3,036,131円
平成23年度繰越金	1,746,570円
合 計	4,782,701円
【支出】	
年会費通知発送費	486,087円
球技大会補助費	40,000円
薬友会誌発刊費	851,257円
薬友会名簿発刊費	0円
九大薬学部祭費	160,000円
卒業祝賀会記念補助費	200,000円
支部支援金	800,000円
支部講演会支援金	0円
全学同窓会負担金	0円
会議費	163,185円
通信費	20,560円
事務用品費	8,418円
謝金	0円
金融機関手数料	110,223円
予備費	9,000円
小 計	2,848,730円
積立残金	1,933,971円
合 計	4,782,701円

九大薬友会予算

平成25年度 九大薬友会予算案	
【収入】	
薬友会入会金 (6000円×65口)	390,000円
年会費 (3000円×850口)	2,550,000円
UFJニコスカード (3000×69)	201,000円
預金利息	150円
小 計	3,141,150円
平成24年度繰越金	1,931,971円
合 計	5,073,121円
【支出】	
年会費通知発送費	480,000円
球技大会補助費	40,000円
薬友会誌発刊費	850,000円
薬友会名簿発刊費	0円
九大薬学部祭費	160,000円
卒業祝賀会記念補助費	200,000円
支部支援金	800,000円
支部講演会支援金	200,000円
会議費	165,000円
通信費	25,000円
事務用品費	10,000円
金融機関手数料	120,000円
予備費	100,000円
小 計	3,150,000円
積立残金	1,923,121円
合 計	5,073,121円

以上

～九州大学大学院薬学研究所～
博士学位受領者

池田恵理子 H25.3.26 九州大学大学院薬学府 (医療薬科学)
 分子時計を基盤とした慢性腎臓病における中枢神経障害発症機構の
 解明

兼重 晋 H25.3.26 九州大学大学院薬学府 (医療薬科学)
 後発医薬品 (ロキソプロフェンナトリウム錠) の製剤学および治
 療学的同等性に関する検討

楠瀬 直喜 H25.3.26 九州大学大学院薬学府 (医療薬科学)
 生体リズムに着目した神経障害性疼痛の病態解明と新規治療法の構
 築

小木曾俊孝 H25.3.26 九州大学大学院薬学府 (創薬科学)
 [6]ヘリセン骨格を基盤とする新規有機分子触媒の開発研究

中村 勇二 H25.3.26 九州大学大学院薬学府 (創薬科学)
 2,2-ジメチル-5-オキソ-4-フェニルピペラジン骨格を有するレニン阻
 害剤の合成及び構造活性相関研究

齊藤 順平 H25.3.26 九州大学大学院薬学府 (医療薬科学)
 薬物トランスポーターのエピジェネティック制御に着目した発現個
 人差の要因解明

西村 健太 H25.3.26九州大学大学院薬学府 (医療薬科学)
 有機カチオントランスポーター-MATE2-K の遺伝子多型解析及び
 基質輸送機能への影響評価

秋元 望 H25.3.26 九州大学大学院薬学府 (医療薬科学)
 CCL-1の神経細胞およびグリア細胞との連関の解明、および疼痛発
 現との連関の解明

岩下 弘樹 H25.3.26 九州大学大学院薬学府 (医療薬科学)
 気道過敏性関連遺伝子CLCA1およびECF-Lの呼吸器疾患治療標的
 としての可能性の検証

高露 雄太 H25.3.26 九州大学大学院薬学府 (医療薬科学)
 アストロサイトSTAT3シグナルを切り口とした神経障害性疼痛に
 関する研究

中田恵理子 H25.3.26 九州大学大学院薬学府 (医療薬科学)
 P2X4受容体アンタゴニストNCP-308の神経障害性疼痛における鎮
 痛作用に関する研究

日置 剛司 H25.3.26 九州大学大学院薬学府 (医療薬科学)
 テストステロンの脳内機能についての生化学的解析

行弘 信仁 H25.3.26 九州大学大学院薬学府 (医療薬科学)
 霊長類を用いたメラトニン受容体作動薬ラメルテオンの睡眠誘発作
 用に関する薬効薬理研究

岩切 詩子 H25.3.26 九州大学大学院薬学府 (医療薬科学)
 薬剤師による薬学的管理の重要性に関する研究 -精神疾患および
 がん患者を中心として-

辻 巖一郎 H25.3.26 九州大学大学院薬学府 (創薬科学)
 ビスアリアルポリカチオンリガンドによるDNAキラリティーの認
 識と変換および光制御への展開

青木絵理子 H25.3.26 九州大学大学院薬学府 (創薬科学)
 2本鎖DNAの鎖交換反応を引き起こすビスクロ型人工核酸の発見
 と機能解明

中尾 精希 H25.3.26 九州大学大学院薬学府 (創薬科学)
 ヒト細胞粗抽出液を用いた1本鎖ギャップDNA複製系の構築と解
 析

三次百合香 H25.3.26 九州大学大学院薬学府 (医療薬科学)
 神経興奮性アミノ酸光学異性体の二次元HPLC-一斉分析法開発と創
 薬・診断への展開

水戸 文弥 H25.3.26 九州大学大学院薬学府 (創薬科学)
 脂質ラジカルの検出・同定・画像化を可能とする多機能性プローブの
 開発と生体モデルへの応用

菰方 浩人 H25.3.26 九州大学大学院薬学府 (創薬科学)
 抗体の交差反応性を利用した新規医薬シーズ探索法の開発

白水 隆喜 H25.3.26 九州大学大学院薬学府 (創薬科学)
 海綿由来新規リンパ管新生阻害物質の創薬化学的研究

植仲 和典 H25.9.24 九州大学大学院薬学府 (医療薬科学)
 抗アミロイドβモノクローナル抗体ソラネズマブの臨床開発におけ
 るPK/PDモデリング&シミュレーションの応用に関する研究

加生 和寿 H25.9.24 九州大学大学院薬学府 (医療薬科学)
 Novel mechanisms of specific DnaA-binding sequences in the
 Escherichia coli chromosome for cell cycle-coordinated regulation
 of the replication initiation

人 事 異 動

発令年月日	講座・分野等	異動内容	氏 名	職 名	異動前の職業又は異動後の職業
平成24年10月1日	(寄 附 講 座) 革新的バイオ医薬創成学	任用更新	米 満 吉 和	教 授	H24.10.1～ H27.9.30
平成24年10月1日	(寄 附 講 座) 革新的バイオ医薬創成学	採 用	原 田 結	助 教	革新的バイオ医薬創成学講座学術研究員より
平成24年9月30日	(寄 附 講 座) 革新的バイオ医薬創成学	雇用期間 満了退職	吉 田 久 美	助 教	革新的バイオ医薬創成学講座学術研究員へ
平成24年12月1日	薬 効 安 全 性 学	昇 任	仲 矢 道 雄	准教授	同分野助教より
平成25年3月1日	創薬育薬産学官連携	採 用	富 田 拓 郎	助 教 (フェニエトラック)	アメリカ国立衛生科学研究所 研究員より
平成25年3月31日	分 子 生 物 薬 学	退 職	末 次 正 幸	助 教	立教大学准教授へ
平成25年3月31日	細 胞 生 物 薬 学	退 職	藤 田 英 明	助 教	長崎国際大学教授へ
平成25年5月1日	薬 効 安 全 性 学	採 用	長 坂 明 臣	助 教	富田製薬株式会社より
平成25年5月1日	医 薬 細 胞 生 化 学	採 用	吉 田 和 真	助 教	Institute of human genetics-CNRS・Post-docより
平成25年6月1日	機能分子合成化学	配 置 換	秋 田 健 行	助 教	任期制廃止に伴い、同分野准助教より
平成25年6月30日	薬 用 資 源 制 御 学	退 職	田 浦 太 志	助 教	富山大学准教授へ
平成25年7月1日	細 胞 生 物 薬 学	採 用	廣 田 有 子	助 教	新潟大学大学院医歯学総合研究科特任助教より
平成25年7月23日	医 薬 細 胞 生 化 学	育児休業	杉 本 のぞみ	助 教	～ H26.2.28
平成25年7月31日	創薬育薬産学官連携	退 職	西 田 基 宏	准教授	自然科学研究機構 岡崎統合バイオサイエンスセンター教授へ
平成25年10月1日	分 子 生 物 薬 学	採 用	加 生 和 寿	助 教	九州大学大学院薬学府博士後期課程修了後採用
平成25年10月1日	薬 用 資 源 制 御 学	採 用	坂 元 政 一	助 教	長崎国際大学薬学部薬学科助手より



編集後記

2013年の流行語は、「今でしょ」、「お・も・て・な・し」、「じぇじぇじぇ」、「倍返し」の、史上最多の4つが大賞に選ばれました。他にも数多くの候補があり、例年に比べ大豊作だったようです。

薬学部も多くの出来事がありました。中でも新研究棟「グリーンファルマ研究所（仮説）」の建設が決定したことは非常にうれしいことです（詳細は、「会長挨拶」をご覧ください）。また昨年同様、受賞・ニュース欄を設けましたが、本年も多くの先生方、学生さんが受賞されていますので、どうぞご覧ください。

一方で、将来に向け「九大薬友会の在り方の改革に関する提言」の報告もごさいます。詳細は3ページをご覧頂くとして、薬友会は人的ネットワークを提供する場としてありたいと思っております。そのためにも、あるいは薬友会をより良くしていくためにも会員の皆様方からのご意見を頂ければ幸いです。下記までご連絡ください。

812-8582 福岡市東区馬出3-1-1 九州大学大学院薬学研究院九大薬友会事務局

E-mail : yakuyu@mail.phar.kyushu-u.ac.jp

このたびの薬友会誌編集、校正では、薬学研究院各分野の先生方、ならびに学生係等の職員の方々、薬友会各支部の方々にご協力頂きました。この場を借りて御礼申し上げます。また、編集・校正では小野高速印刷㈱の田崎様にご尽力頂きました。深く感謝いたします。

最後になりましたが、今後も薬友会への変わらぬご支援をお願いするとともに、会員の皆様のご発展をお祈り申し上げます。